

「凄いな！よくそこまで調べたね」

「いや、俺ばっかじゃないっす。さっきも一寸言ったように俺には警察に友達がいる、いろいろ情報を提供してくれるんす。そいつも半分おたくなんで、気が合うっちゅうか。俺もいろいろ追跡して調べたから、二人の情報を総合して考えると今話したような内容になるんすよ。それにしても男と女はどうしてこんな風に痴情を絡ませるのかな。旦那を陥れたあの女なんて大した玉っすよ」

「もし、鹿島さんの話が真実だとすると、野岸さんのご主人は無罪ということになるだろう」

「そうっす。だけんど、まだ不明な点があるし、検察当局としても一度結審している有罪判決を覆したくないから動こうとしないんす。冤罪ということにでもなったら責任問題だからな」

「そうか。兎に角その竹下さんの失踪事件にけりが付かないと、この事件は解決しない訳だ」

「そう、警察が逮捕を躊躇しているのは、暴力団の男の自白を得られたとしても、物証が無いからなんす。賢さん、暴力団の男をぶち込む為に、何かいい方法は無いっすかね」

祐子と亜希子は目を丸くして話を聞いていたが、亜希子が言った。

「わたくし、テレポーテーションの経験があります。自分がとても絶望的な空虚な感覚に包まれていて、そのなかで誰かに縋りたいと強く思った時、自分とその相手の人との間に、何か線の様なものが出来上がりました。その悲しみのような感情がピークに達した時、不意にその線の上を自分が滑っているのを感じました。気が付くと相手の方のおられる所に現れていたのです。その時は、自分の意識の範囲にあったものは全て一緒に移動したように思います」

「そうだ、亜希子、失踪は執着から解放された時に起き、テレポーテーションは、自分が完全に空虚なとき、最も存在したい位置との間に通路が出来てそこに移動することだ。自分は自分自身の認識によって定義されるから、周りのものも含まれる可能性が大きい」

「と言うと、竹下さんは大阪から青森にテレポーテーションしたという

ことっすか。それも盗難された自分の車の中に。一寸考えにくいな。だって車はそれより10日も前に盗まれてて、何処にあるかも分からなかったんすから」

「鹿島さん、野岸和也さんと竹下さんはどういう関係なんだか分からない？」

「大体のことは分かったすよ。さっきも言ったように3人は同じ悩みを抱えていた友人—と言うより飲み仲間—だったようっす。時々幽体離脱というか、ぼ—っとしていて間に何所か遠くに移動して、そこで何かを見たり体験したりして戻って来る。そういう共通した性癖があって、周りの人達から怪訝な目で見られていたようなんす。自分で意識しないうちにそういうことが起きていたようで、三人とも悩んでいたようっす。その悩みを、仕事が終えた後の酒で紛らわせていたようなんす。それに、旦那の二人の友人は過去に京都に住んでいた一人の女性—大河原早苗さんのことだけ—彼女を巡って激しく争ったことがあって、結果、当の早苗さんはイケメンだった友人の方を選び、竹下は負けたんす。その友人が早苗さんと結婚して青森に移り住んでしまったようなんす。友人大河原と早苗さんとの間には二人の子供が出来たけど、竹下は早苗さんのことを忘れられなかったようす。そんな時、その友人が例の被害者の女性蔓木元子と関係して、妻のことを蔑ろにしていることを知って、竹下はとても空しい感覚に捕らわれていたようなんす。竹下がどうして知ったかは分からないっすが、早苗さんが暴力団に脅迫されて、強制的な肉体関係を繰り返し迫られている事を知って、なんとか救いたいという意識が強く湧いて、青森に繋がったのじゃないかと思うんす。早苗さんの方も、夫との中が疎遠になって来るにしたがって、過去の三角関係で自分を慕っていた竹下に思いを寄せるようになって、お互いに惹き合うようになったようなんす」

「そうか、それでテレポーテーションが起きたんだ。ところで、盗まれた車がどうして青森にあったかということだけど、僕が想像するに、あの車は暴力団の男が盗んで、その車で青森まで行ったんじゃないかと思うんす。その車に早苗さんを乗せてどこかに移動している時、早苗さ

んの救いを求める意識に同調して、それを救おうと竹下さんが車の中にテレポートした。早苗さんも暴力団の男もビックリしただろうな。その時の衝撃的な反応で、そこに定着せずにハーフコートだけ残して、そのまままた失踪してしまったと考えるとストーリーが繋がるな」

「いずれにしても、この事件はもうじき解決するような気がするっすよ。ただ、失踪事件の方はどうなるか分からないっすけど」

「鹿島さん、その早苗さんは現在何処に居るか分かりますか？」

「うん、青森の家に一人で居るっす。子供達と義母の死体が発見された後、奥さんはほとんど発狂寸前だったようなんす。その後も全く生気を失ったようになっていたけど、ようやく最近になって普通に生活できるようになったようなんす。京都の実家のお袋さんがこの青森の家に来て早苗さんの面倒を看っていて、毎日京都の実家に戻るように説得したけど、「自分の責任で二人の子供と義母を亡くした」と言ってそこから動かないようなんす。亭主大河原の方はと言うと、自分の浮気が原因で起きたと思われる悲惨な事件に面と向かえずに、大阪での単身赴任を続けているようなんす。この亭主は盛岡の会社から復職の許可が下りたらしいんだけど、大阪の勤務を志願して戻らないらしい。きっと早苗さんと顔を合わせて生活できないんすね」

「まるで地獄絵ね。なんとか救ってあげられないかしら」

祐子が賢の目を見て確認するように言った。

「早苗さんは自分の選んだ人生だから、自分でそれを背負おうとしているんだろう。ただ、竹下さんは不確定な要素に翻弄されて失踪したようだから何とかしてやりたいな」

亜希子はふと窓の外を見つめた。雪が降り始めていた。外の薄暗い雰囲気重苦しさが増してきているように感じた。そして、賢がジャケットだけなのが気になった。

「雪が降り始めましたね。これから東京まで戻るのにどの位掛かるかしら？」

「新幹線で行けば五時頃には東京に着くと思うけど、俺は一旦盛岡で降りて被害者の女性蔓木元子さんに会ってみようと思うんだ」

「賢さん、俺も同行するっすよ。彼女に一度会ってみたかったんす」
「それは心強いですね。是非一緒に行きましょう。祐子と亜希子は先に帰っていてくれないか」
「わたしも行くわ」
「わたくしも連れて行ってください」
「いや、4人も行ったら警戒心が湧いて、何も話さないんじゃないかな」
「それなら、わたくしたちあなた達が面会を終えるまで待っているわ。ね、亜希子さん」
「はい、そうしたいと思います」
ふたりの女性は兎に角賢と一緒に居たかった。

野内

4人は2時40分頃盛岡に着いた。賢は朝の内に蔓木元子との面会の約束を取り付けていた。約束の時間は3時である。元子の会社まではタクシーで10分ほど掛かった。会社の前に小さなスナックがあった。祐子と亜希子はそのスナックで賢達を待つことにした。賢と鹿島康介は会社の社員食堂の中に作られた衝立で仕切られた面会所に通された。ここでは他の面会者に話が筒抜けになると思ったが、贅沢は言えなかった。面会に応じてもらえただけでも有り難かった。面会所に入ったのは3時を少し回った頃だったが、それから10分ほど待たされて漸く蔓木元子が姿を現した。蔓木元子は作業服を着て、長い栗毛色の髪を後ろで束ねた32、3歳の女性だった。目は丸く大きく、それとはっきり分かるアイシャドウを着けている。濃いピンク色の口紅が色白な肌に妖艶さを添えていた。

「蔓木ですが、5年前の事件のことで何かお聞きになりたいことがあるのでしょうか？」

「初めまして、内観賢と申します」

「こんちわ、鹿島康介す」

「今日は不躰におじゃまして申し訳ありません。わたくしはあの事件で有罪判決を受けて服役中の野岸和也さんの友人です。どうしても腑に落

ちないことがありますて、貴女に伺いたいと思ひました。質問させて頂いてもよろしいでしょうか？」

「あの事件はもう結審して、野岸和也さんは有罪が確定して服役しているはずですが」

「わたくしたちは、野岸和也さんは無罪だと考えていますので、再審請求を出すつもりです」

「それはそちら様のご勝手ですが、そう簡単に受理してもらえないと思ひますよ」

康介が口を挟んだ。

「蔓木元子さん、最近例の青森の祖母と孫2人の殺人事件で暴力団の男が逮捕されたことをご存じですか？その暴力団の男があんたの傷害事件に絡んでいることが分かったんす」

元子の顔からサッと血の気が引いた。明らかにうろたえた様子が見えた。賢が後を続けた。

「あなたは「あの時自分を刺した人間が誰か分からなかった」と仰っていますね。それに「自分は50万円の金を所持していた」とも証言していますね。もしそれが真実でなかったら、偽証罪になりますよ。しかも犯人を庇うような証言をしたことになります」

「あなた方はわたしを脅しに来たのですか？！」

蔓木元子の甲高い大声に、隣の面会所から従業員と思われる男性が二人顔を覗かせた。

「いいえ、決して脅してなどいません。我々は野岸和也さんを救いたいただけです。もしあの時の証言が誤りだったら、手遅れになる前に警察に行つて証言して欲しいのです。暴力団の男が自供するのは時間の問題だと思います。あの時とは状況が変わつています。もう野岸和也さんは口を閉ざす必要が無くなつています。守ろうとしていた友達の家族が奥さんを除いて全員殺されてしまいましたから。再審が受理されたら野岸和也さんが沈黙を破るでしょう。それと暴力団の男の自白、物証が揃うと、その結果、判決が覆つて冤罪ということになると思ひます。そうすると偽証罪だけに止まらず、今度は冤罪による受刑の保障の問題が出

て来ますし、もし野岸孝子さんがご亭主の受刑期間の損害賠償を請求する場合、その相手は偽証した人ということになる可能性が大きいと思います。早くご決断をされた方がいいと思いますが」

「な、なんと言うことを！わ、わ、わたしは被害者ですよ！その被害者に向かって、な、なんて言い草ですか？！」

「あなたは、どなたかに腹部を刺されて3ヶ月間肉体的苦痛を受けました。しかし、あなたの為を思ってお金を用意してあげていた恩人を牢獄に投げ入れて、その金を取り上げ、その方に5年間の絶望的苦痛を舐めさせているのです」

「誰がそんな出鱈目を・・・」

「おれだよ。もう少しで、あんたのところにも警察が来ることになると思うすよ。早く出頭した方がいいと思うけどな」

「わたしはあの男に刺された被害者よ！あいつはわたしを脅迫していたのよ」

「一寸待って。それじゃ、あん時暴力団の男もあそこにいたっちゅうわけ？」

「ええ、確かにあいつだったような気がするわ！」

「蔓木さん、また嘘をつくよ、今度は本当にあんたが牢屋に入ることになるよ。大体、あん時あの暴力団の男は、青森に行っていたんだからな」

「・・・・・・・・じゃ・・・一体誰なのよ・・・・・・・・わたくしを刺したのは？」

「そいつを庇うのもいいけど、あんたも有罪になるぞ」

「あんた達、何しに来たのよ！わたしを脅してばかりいて、人を呼ぶわよ！」

甲高い蔓木元子の声に、また、隣から2人の従業員の男達が姿を見せた。今度は立ち上がって様子を窺っている。賢は康介に目配せしてから言った。

「申し訳ありませんでした。わたくしたちは野岸和也さんを救いたい一心で、こちらに参りました。あなたが警察に出頭されて事実を報告して頂くことを切にお願いしたいと思います。今日は突然お邪魔して大変申

し訳ありませんでした」

ふたりは面会所を後にして正門を出ると、祐子と亜希子の待つスナックに立ち寄った。祐子達はスナックの奥の壁に設置してある液晶テレビに流れているニュースを見ていた。祐子がスナックに入って来たふたりに気付いた。

「あら、早かったじゃないの」

賢はカウンターの亜希子の横に座った。康介は反対側に廻り祐子の横に座った。

「賢さん、うまくいったかな？ 蔓木元子はなかなか手強いっすよ」

「ええ、多分近い内に行動に出ると思いますよ。蔓木元子さん、大分慌てていましたからね」

「ねえねえ、どうなったの？」

「うん、鹿島さんが青森で暴力団の男が逮捕されたことを話したら、彼女途端にうろたえた様子になったんだ。だから、警察に行って真実を告白するように諭しておいた。大分反発していたけどね」

「早く野岸和也さんの無罪が認められるといいですね」

亜希子が賢の方に身体を向けて言った。

「鹿島さんのおかげで急速に進展しそうだ。竹下さんの失踪事件が解決すれば、野岸和也さんの無罪の証明もできる。竹下さんの証言があると、50万円の件が解決するからな。だから、俺はこれから青森に行って大河原早苗さんに会うよ。竹下さんの帰還は早苗さんに懸かっていると思うから」

「あなた、一度東京に戻って休息した方がいいんじゃないかしら？」

「そうですわ、賢さん。やっと孝子さんのことが片付いたのですもの」

「いや、俺は野岸和也さんのことが解決しないと心身共に休むことはできない。君達ふたりで青山に帰ってご両親に報告しておいてくれないか？」

「わたし、一緒に行きたいわ。少しでもあなたの手伝いをしたいのよ」

「わたくしもご一緒させて頂きたいと思います」

「賢さん、衷心のアシスタントが居て羨ましいっす。おれも一緒に行き

たいけど、仕事があるから一寸無理だなあ」

「今回は祐子と亜希子は帰ってくれ。殺人事件絡みだから何が起きるか分からないし、それに、今回の結果をご両親に報告しておかなくてはいけないと思うんだ」

「分かったわ。でも、早く解決して帰って来てね」

「わたくしが必要になったらいつでも連絡ください。わたくしテレポーションも出来ますから・・・ふふっ」

「わたしは飛行機で来るわよ。確実な方法でね・・・ふふっ」

賢は盛岡駅で三人と分かれた。新幹線で八戸まで行き、そこから特急を使って青森駅に降り立ったのは6時過ぎだった。取り急ぎ案内板から駅前のビジネスホテルの電話番号を拾い、スマホで電話を掛けた。幸い空き部屋があった。ホームを出ると、薄暗がりの中に路肩に積もった雪が街灯の灯を受けて浮き出ている。迎いの乗用車がロータリーに並んでいた。駅で降りた人の多くは連絡船の乗り場に向かって進んでいるようだ。やはり本州の最北の街に降り立ったという実感が湧いて来た。賢は滑らないように注意をしながら、そろりそろりと一歩ずつ意識を集中して歩いた。青森ホテルという名前の大きなビジネスホテルに入ると、直ぐにチェックインすることができた。部屋は5階だった。ベッドの脇にトラベルバッグを置き、突き当たりの窓から外を覗き見た。雪は降ってはいなかったが、降り積もった雪が建物の屋根を真っ白く覆っている。直ぐ先に連絡船の桟橋が見えた。既に船は出たばかりのようで、先ほどまで大勢いた人影はほとんど見えない。積もった雪の中に黒い道筋が縦横に通っているのが伺えた。ふと祐子と亜希子の顔が浮かんで来た。賢は暫く外の景色に意識を移していたが、やがてカーテンを引くとバスルームに向かった。シャワーの湯のぬくもりが寒さで固くなった身体をほぐしてくれる。身体を拭いて下着を着替えようとしたが、トラベルバッグの中に新しい下着は残っていなかった。賢は一度着替えた下着の中から汚れの少なそうな1枚を取り出して着替えた。シャワーを浴びた後はどうしても着替えたかった。そういう反応をする自分を可笑しいと思った。賢はランドリールームで下着を洗濯することにした。ランドリーは空いて

いた。こんな冬にランドリーマシンを使う奴なんているはずはないと思っていたが、賢が脱水乾燥を終える頃、50歳過ぎの男性がワイシャツと下着を抱えてランドリールームに入って来た。

「寒いですね。どこからお出でで？」

「東京からです。昼過ぎに盛岡からこちらに来たんです」

「そうですか。わたしも東京なんですが、昨日秋田からこちらに来ました。北国は寒いですね。寒さが骨の随まで滲みますよ。風呂に入っても、なかなか芯まで温まらない。こちらにはどの位滞在されるのですか？」

「2, 3日で済ませたいと思っていますが」

「わたしはあと1週間ほどここに居なくてはなりません。お互い風邪を引かないように頑張りましょう」

「ええ、それではお先に失礼します」

愛想のいいビジネスマンだと賢は思った。乾燥機から出した衣類はほとんど乾いていて、そのまま身に付けても大丈夫のような気がした。しかし、賢は部屋に戻ると、タオル掛けからタオルを抜き取って、そこに今洗った下着を詰めて干した。それから、トラベルバッグからノートを取り出しベッドの上に置いた。鹿島康介が言うには、大河原早苗の家は青森の市街地ではなく、東北本線の八戸方面4つ目の野内駅から山裾まで行ったところにあるとのことだった。賢は番号案内で早苗の家の電話番号を確認し電話を掛けた。

「はい、大河原でございますが」

物静かで上品な感じの応答が帰って来た。

「もしもし、わたしは内観賢と申します。わたしは最近発生している一連の失踪事件について調査している者です。大河原さんにおかれましては1年前に大変な目に遭われて、お心に深い傷を負われたこととお悔やみ申し上げます。あの事件の犯人ですが、わたしたちが追い掛けている失踪事件に関係している人間の可能性がありそうなので、その件についてお話ししたいのです。もしお許し頂けたら、お宅に伺わせて頂きたいと思うのですが」

「もしもし、最近逮捕された暴力団の男、栗原のことですか？」

早苗の栗原に対する憤怒の感情が伝わってきた。

「はい、その男にも関係しますが、この事件の背景にある複雑な人間関係が分かってきたのです。ご主人の友人の野岸和也さんという方がその人間関係の中で起きた事件の冤罪で秋田刑務所に服役中なのです。わたしたちは彼を救おうとして関係者を調べていたのですが、そんな中であなたが受けたあの災難の犯人が浮かび上がってきたのです。そして、現在失踪中の竹下さんのことも・・・できましたら、一度お会いしてお話させて頂きたいのですが・・・」

「わたくしは、あの事件以来生きる意欲を失ってしまいました。何度、死んでしまおうかと思ったかわかりませんが、このまま無為に死ぬことは許されないと思い直しました。そう思ってもやはり、毎日抜け殻のようにただ朝起きて食事をして夜寝るだけの生活を送っています。一日中、二人の娘と義母のことが頭から離れません。子供達を守れなかった自分の不甲斐なさに涙が流れ、身体が震えてきます・・・・・・わたくしも、一日も早く警察に犯人を逮捕して頂いて、墓前に報告したいと思っています・・・・・・いつでも構いません。是非いらしてください。お話を伺いたいと思います。そして、わたくしの知っていることは何でもお話しします」

涙を堪えながら話す早苗の声は震え、今にも号泣の淵に落ちるのではないかと思われた。

「ありがとうございます。わたしは先刻青森に着きました。駅前の青森ホテルに滞在しています。ここからですとお宅までどの位掛かるでしょうか？」

「電車の待ち時間を除けば30分も見ておいて頂けば十分と思います」

「それでは明日、9時30分頃伺わせて頂きます」

賢は1階にあるレストランで食事を済ますと、部屋に戻りベッドに身を投げ出して、「失踪事件調査ノート」に康介から教えてもらった情報を追記した。康介の情報収集能力が極めて高いことに改めて驚きを感じた。それは警察官に友人がいる所為でもあったが、どうしてあそこまで細かく調べられたのか不思議に思った。賢はノートにメモを書きながらその

まま眠りに落ちた。ペンは賢の手を離れベッドの脇の床に落ちた。賢が身体の重さに苦しくなって飛び起きたのは真夜中の1時を回った頃だった。暖房が入っているのにもかかわらず、身体の冷えを感じていた。重たいものが身体の上に覆い被さっている。賢は幼い頃に経験した金縛りが起きたのだと思った。身体の上に乗っているものを右手で押し退けるようにしながら目を開けた。賢はびくっとした。亜希子だった。賢の身体の上に自分の身体を重ねて抱きつくようにしていた。

「亜希子、亜希子じゃないか？・・・一体、どうした？」

「また来てしまいました。だって、家に戻って床に着いたら、無性にあなたに会いたくなって、とても寂しくて・・・あなたのことを思い描いていたから、ここに来てしまいました」

賢は亜希子の身体の下から滑り出して身体を起こすと、亜希子を横に座らせた。

「亜希子、一旦家に帰ったのか？ご両親には会ったのか？祐子はどうした？」

「はい、一旦家に帰りました。お風呂に入ってからお食事を頂きました。その後でお姉様と一緒に今度の遠野の結末を両親に報告致しました。両親はとても喜んでくれました。暫くは家でゆっくり過ごすように言われました。わたくしもそのつもりでしたが、部屋に戻ってベッドに潜り込んだら、直ぐに寝入ってしまったのです。ところが夢にあなたが現れて、わたくしを手招き致しました。はっと気が付いたらあなたがいなくて、あなたに気が付き、夢と現実が渾然一体となってとても悲しくなってきた、あなたのことを探し求めていたらここに来てしまいました」

亜希子はパジャマ姿であった。賢は亜希子の手を握って言った。

「寒くないか？・・・今日はもうどうすることもできないから、このまま寝よう」

賢は自分が着替えもせずにベッドに身を投げていたのを思い出して、ベッドから下りて急いで衣類を身に着けた。亜希子はどうしていいのかわからず、おどおどしながらベッドから下りた。賢はシーツを広げ亜希子を寝かせて、シーツをそっと掛けてやった。

「さあ、此処に寝て」

暖房が入っているとはいえ、寒さが身体の芯を冷やしているのが分かる。賢は窓際の二人掛けソファで寝ることに決め、クローゼットの棚の上にあった毛布を持ってきて、^{くる}包まって寝た。

二人が目を覚ましたのは6時を少し回った頃だった。賢はソファで眠った割には疲れが取れていることを心地よく感じた。

「おはよう、眠れたか？ 今日9時半に大河原早苗さんの家に行くことになっているんだ。亜希子も一緒に行くか？」

「わたくし、ごめんなさい。何時も賢さんにご迷惑をおかけしてしまつて。椅子では眠られなかったのではないですか？」

「いや、結構ぐっすり寝たよ。大丈夫だから気にしなくていいよ。それより、一緒に行くか？」

「わたくし、連れて行って欲しいのですが、衣類を何も持っていませんから……」

「そうだったな。今日は一時俺の服を着ているしかないな。少しだぶつくかも知れないけど……大河原早苗さんに会ったら一旦ここに戻って来るから、それから近くのデパートに行こう。そこで直ぐに衣類を買って着替えよう。それまで、少し寒いかも知れないけど我慢出来るか？」

「わたくしは大丈夫です。ごめんなさい。いつもあなたの足手まといになって、邪魔ばかりして……」

「ちっとも邪魔じゃないよ。亜希子が側にいてくれるだけで俺は安心できる」

ふたりは、賢は昨日洗濯した下着をタオル掛けから取って身に着け窓際に行つて外に目をやった。その間に亜希子はパジャマを脱いで賢の汚れたシャツとジャケットを取り出して身に着けた。男物の服を着るのは初めてだった。ごわごわして、肌に馴染まなかった。賢の汗の臭いが微妙に感じられる。亜希子はむしろそれを心地よく感じた。食事を済ますと、賢はチェックインカウンターに寄り、「昨日急に宿泊することになった」と説明して亜希子を追加してもらった。フロントの女性が、賢にメッセージのメモをよこした。祐子からだった。直ぐに電話が欲しいという内

容だった。二人はホテルの部屋に戻った。賢が祐子に電話を入れた。

「賢さん、大変よ。亜希子さんが又居なくなっちゃったのよ」

「祐子、大丈夫だ。亜希子はテレポーテーションしてここに来ちゃったんだ」

「えっ！今、そっちにいるの？」

「うん、ここに居るよ。一寸替わろうか？」

「もしもし、亜希子です。お姉様、ご心配をお掛けして済みませんでした。わたくしまたテレポーテーションしてしまいました。自分ではどうすることもできなくて」

「でも、部屋からのテレポーテーションじゃ旅行の支度はしてないでしょ」

「はい、これから必要な物を買に行きます。おとうさまやおかあさまにも伝えてください。わたくしは大丈夫ですからご心配なさらぬようにと」

登紀子が電話口に出た。

「亜希子さん、大丈夫なの？おとうさまも心配していらっしゃるわ。内観さんをお願いして必要な物を買揃えなさい。そして、できるだけ早く戻っていらっしゃい」

「はい、おかあさま。内観さんがいろいろ面倒を看てくださるので、わたくしは大丈夫です。おとうさまにもそう伝えてください。内観さんに伺ってできるだけ早く戻るように心掛けます」

「もしもし、亜希子さん、内観さんと替ってくださる？」

祐子がやや、苛ついた口調で言った。

「賢さん、大河原早苗さんにはもう会ったの？」

「いや、これから会う予定だ。結果を今夜にでも知らせるよ。祐子、亜希子のことは心配しなくてもいいよ」

「・・・でも、気を付けてね」

9時少し前に賢は亜希子を残して部屋を出た。早苗が言ったように東北本線に乗り青森から4番目の野内駅で電車を降りると辺りは雪に包まれていて、本州の最果ての地に来たという感覚が強く湧き上がってきた。

ホームから外に出ると、路肩の積雪は膝の高さほどあった。雪が解けて、水っぽくなった轍を辿って早苗の家を探した。山を背にした住宅地の中ほどに早苗の家はあった。家はそれほど大きな家ではなかったが比較的新しかった。玄関の呼び鈴を鳴らすと直ぐに早苗が現れた。小柄で少し痩せた感じのする35歳前後の女性だった。目は一重で細いが、目尻が尾を引いたように流れていて、細い^{まつげ}睫に良く合っている。鼻もあまり目立たなく細い。小さな唇には口紅も付けていなかった。

「おはようございます。朝早くからお伺いして大変恐縮です」

「内観さんですね。お待ちしております。お寒かったですでしょう。さあどうぞ、お上がりになって足をお温めになってください」

賢は居間に通された。居間には炬燵があり、角に仏壇が供えられていた。仏壇には二人の子供と義母と思われる初老の女性の写真が、写真立てに入れて祀られている。部屋の中はホッとする穏やかな暖かさに満ちていた。まだ線香の残り香が漂っている。賢は先ず仏壇の写真に向って手を合わせてから、線香を立てさせてもらった。

「今年ももうすぐ暮れるのに、寒さだけしか感じないのよ。あれからもう1年になるけど、毎日子供達のことを思い出していると、悲しみも悲しみではなくなって、悲しみなんて感情は自分が作り出しているような気がして来ます。内観さん、遠いところをいらしてくださいありがとうございます。東京からいらっしゃったのですか？」

「住まいは東京ですが、わたしはつい昨日まで遠野に居たのです。遠野の失踪事件の解決に取り組んでいて、やっと目鼻が付いて昨日の昼頃花巻から盛岡に出たのです。青森と聞くと最果ての北国というイメージを覚えましたが、盛岡からですとここまでそんなに時間が掛からないんですね」

「それでも、わたくしたちにとっては盛岡はずっと遠くの街ですわ」

賢は早苗が悲しみの中にいるはずなのに、想像していたほど陰鬱でもなく、寧ろ話す言葉に明るささえ感じてほっとした。賢は今年の殺人事件について早苗の理解していることを聞いてみた。早苗は二人の子供と義母が乗用車に乗せられたらしいこと、そして殺され高山の山中に遺棄さ

れたことなど賢が既に聞き知っている内容を淡々と説明した。その内容は康介の推理と合致していた。しかし、康介が語った複雑な人間関係については触れようとしなかった。賢はそれを聞き出すのはかなり難しいかもしれないと思った。

「今ご説明頂いたことは、わたくしたちが認識している事件の概要と合っています。その事実の裏に、複雑な人間関係が存在していることはご存知でしょうか？」

「・・・はい、そこがわたくしの一番気になっているところなのですが、何分人の感情が絡むので、説明しようとするとしても自分の感情が入ってしまいます。わたくしの感じていることでしたらお話できますけど」

「それで結構です、できましたらあなたの感じていることを是非ご説明頂きたいです。お話ししたくないことではと思いますが、あなた自身に関係することも、もしお話頂ければ犯人の特定ができるかも知れません。今度逮捕された暴力団の男についても、ご存知のことがあったら是非お話頂きたいのですが」

「わたくしはこれまで、弁護士さん以外にはこの話はしていませんが、内観さんが失踪事件を解決しようとして取り組んでおられると伺いましたので、少しでも協力させて頂けたらと思いました。このことがあの殺人事件の犯人の特定に役に立つと思いますので、わたくしの恥はかなぐり捨ててお話させて頂きます・・・実は、捕まった暴力団の男栗原は、憎んでも憎みきれないほど卑劣な人間です。わたくしはあの男に脅されて随分酷いことをされました。初めはお金を要求されました。500万円ものお金です。主人が大阪で栗原の彼女に手を出したと言うのです。その彼女に子供が出来たので、損害賠償と慰謝料だと言っていました。勿論わたくしは、そんな話をそのまま鵜呑みにはしませんでした。一旦話をしようとしてあの男の呼び出しに応じたのです。それが間違いの元でした。強姦されてしまったのです。それからが大変でした。今度はその男との関係を主人や義母にばらすと脅し始めたのです。わたくしも直ぐに警察に訴えればよかったのですが、あの男の脅しに怯えてい

ましたので、時々呼び出される時さえ我慢していればいいと思ってしまいました。しかし、あの男はだんだん暴力を振るい、お金をせびるようになってきました。わたくしはこれ以上我慢できなくなって、あの男の脅迫を撥ね付けたのです。それから随分執拗に電話が掛かって来ました。その電話を義母が取ったのです。義母もわたくしが脅されていることを察知していたようで、その男に対して警察に訴えると言ったのです。わたくしはその話を義母から聞いて戦慄を覚えました。危険だと思ったのです。案の定、わたくしが留守の間に義母と子供たちがデパートに買い物に出たとき、車で強引に連れ去られて殺されてしまったのです・・・」

ここまで言うと、早苗は言葉に詰まってしまった。

「でも、栗原が犯人だという証拠を掴めなかった訳ですね」

「・・・ええ、それに、わたくし、主人の行動にも腑に落ちない点があったので、主人も何か関係しているのではないかと思って警察には言えませんでした。わたくしが絶望の淵から這い上がり、栗原の脅迫に立ち向かう決心をしたのは、大阪に住んでいらっしゃる竹下さんの忠告があったからです。わたくしは結婚する前に竹下さんと付き合っていたのですが、結婚してからは全く繋がりがありませんでした。ところが、あの事件の少し前に何度か連絡を頂いたのです。それは、わたくしのことを気遣ったことだったようです。丁度その頃、わたくしは主人への不信感と栗原への嘔吐を催すような嫌悪感に苛まれて疲弊していましたので、心の拠り処のような気がして竹下さんのアドバイスに耳を傾けたのです。わたくしは自分の置かれている立場を説明しました。彼は、先ず栗原との繋がりを絶つように言いました。勇気が要るが、それをやらない限り一生苦しむと仰いました。わたくしは決心しました。竹下さんはとても親身になってわたくしや家族のことを心配してくれました。主人が外で、ほかの女性との間に問題を起こしていることもあって、わたくしはいっそ主人と別れて竹下さんの下に飛んでゆきたいと思ったくらいです。しかし、彼はあの忌まわしい殺人事件が起きる2日前に突然わたくしの前に姿を現し、直ぐに消えてしまいました。その後何度も連絡を

取ろうとしたのですが、どうしても連絡を取ることができませんでした。あれ以来消息が途絶えてしまったのです。ずっと後になって、竹下さんはあの時失踪していたことが分かりました。主人からの連絡はずっと途絶えていましたし、竹下さんと連絡が取れない上に暴力団の男の脅しが執拗になって来ていましたので、わたくしは不安で堪りませんでした。そんな中であの事件が起きてしまったのです……」

「つらいことを思い出させてしまって、申し訳ありません」

「いいえ、わたくしはもう何も恐れませんが、このことが皆に知られても、失うものは何もありませんから……もっと早く決心していれば、こんなことにはならずに済んだのにと、いつも悔やんで……」

早苗の目から大粒の涙が流れ落ちた。

「栗原から「手を切つてやるから、一度話し合いたい」と言ってきたので、わたくしもほんの僅かな可能性にでもすがろうとそれに応じてしまいました。車に乗せられて国道を走っていた時、急に車の中の雰囲気は霞むようになってそこに竹下さんが現れたのです。夕暮れ時で周りが暗くなっていたから、その姿がまるで亡霊のようで、ほんの一瞬のことでしたが、その時の恐怖はとて言葉では言い表せません。運転中の栗原も驚愕しました。わたくしは悲鳴を上げてしまいました。栗原は急ブレーキを掛けて車を路肩に寄せて停めたのですが、その急停車の衝撃と同時に竹下さんはまた消え去ってしまいました。わたくしは何が何だか分からない上に恐怖がピークに達し、這い出すように車から降りて必死に逃げました。栗原はわたくしを追っては来ませんでした。その後で、義母や子供たちを殺害して……いえ、そうに違いありませんが……高山に死体を遺棄して、車を置いて逃げたのです。本当に悪い奴です」

「竹下さんはやはり、一度盗難車の中に現れたのですね」

「わたくしはとて恐ろしくなりました。あの時現れた竹下さんはお化けのようでしたから……この辺りにも雪女の話があるのよ……そう、あの時も雪がぱらついていたような気がします。もしかすると竹下さんは死んでしまっていて、霊が顕れたのかしら？ 恐山から降りて来たのかしら？ わたくし怖くて怖くて……」

「怖がらなくても大丈夫ですよ。竹下さんは死んであなたの前に亡霊として顕われたわけではありません。説明しても理解して頂けるかどうか分かりませんが、竹下さんの失踪は意識の問題なのです。竹下さんがあの車の中、つまりはあなたの所に来ようと強く意識して、あなたの意識も竹下さんの方向を向いていたので、彼の体があなたの乗っていた車の中に顕れたのです。今地球が変化しているのです。もっと詳しく言うと、地球を含む場が変化しているのです。それで、物質の性質が変わってきているのです。その性質の変化が体の消滅や瞬間の遠隔移動を可能にしているのです。でもそれは全ての人に対して言えることではありません。特に、いつも純粋な心で生きていて、あらゆることに執着の無い心を持っている人がそういう状態になり安いようなのです。竹下さんのことは良く分かりませんが、そういう方だったのでしょうか？」

「そうです。竹下さんはあまり目立たない方でした。朴訥で風采も上がらない人だったので、わたくしが竹下さんと付き合っていた頃、彼が友人だと言って紹介してくれた今の主人が、とてもハンサムで格好良く見えて、主人が積極的に言い寄って来た時にわたくしは今の主人の方に惹かれてしまい結婚してしまったのです。はっきり言って、主人の方が男らしく恰好が良かったのです。竹下さんは随分悲しんだようです。一度、思い直してほしいとわたくしに電話がありましたが、わたしが断ると、その後友達のを思ってか身を引いてしまわれました。わたくしは、竹下さんのそういうところが齒痒かったのです。ところが、主人が大阪に出張するようになってから、竹下さんと主人はそこでまた再会したようです。そうこうしている内に主人がほかの女性との間に関係が出来たのを知って、主人やわたくしにいろいろ忠告してくれるようになったのです。でも、竹下さんが忠告をしてくれ始めたのは、既にわたくしがあの暴力団の男栗原に強姦された後だったのです。竹下さんは主人と相手の女の人の間にあの栗原が関与していることを知ってから、頻繁に忠告してくださるようになりました。わたくしは栗原と関係を持ってしまったことは竹下さんには黙っていました。恥ずかしくてとても言えませんでした。でも今考えると、隠していたのが間違いだったと思います。竹下

さんはとても純粋な方です。そして、いつも相手のことだけを考えているように見えました」

「やはり、竹下さんは純粋な精神を持った方だったのですね。今までわたしが調べて来た失踪者はいずれも、竹下さんと同じようなタイプの方でした。共通することは、あらゆることに対して執着がなくて、相手の事を第一に考えるということです。わたしも竹下さんがそういう方だとお聞きして安心しました。竹下さんと呼ば戻すことができると思うからです。ところで、竹下さんのご家族は大阪にいらっしゃるのですか？」

「いいえ、あの方のご両親は東京にいらっしゃいます。あの方が京都の大学を卒業した頃、ご両親は離婚をされてしまいました。竹下さんは時々ご両親と連絡を取っていたようです。でも、わたくしはあの方のご両親にお会いしたことはありません。ですから詳しいことは分からないのです。ご兄弟は、お兄さんと妹さんがいらっしゃるようですが、どうやら二人のご兄弟は東京でお母さんと同居していらっしゃるようです。竹下さんはご両親の話をほとんどされませんでした。わたくしが伺ってもあまり応えてくれませんでした。竹下さんはご家族から疎んじられていたようです」

「わたしがここに伺った一番の理由は、昨日申し上げたようにこの失踪事件を調査することで、最終的に竹下さんと呼ば戻す為です」

「呼び戻すと仰いますと？」

「竹下さんが一番強く心を惹かれている人が、彼の方向に意識を向けて、呼び戻そうとすると、そこに彼が現れる可能性があるのです。実際、他の失踪された方々もこのような方法で帰還できたのです。ですから、竹下さんの身内の方の事を知りたかったのです。でも、今お話頂いた内容からすると、どうやら竹下さんの意識はいつもあなたの方向を向いていたように思えます。ご家族とはそれほど強い意識の繋がりは無かったようですし。ですから、竹下さんを帰還させる為には是非あなたのご協力が必要なのです」

「詳しくは分かりませんが、わたくしはいつでも協力します」

「ありがとうございます。竹下さんが戻れば、あなたの家族の命を奪っ

た犯人がはっきりすると思います」

「はい、それに、わたくし自身も救われます。今ではあの方の優しさに縋りたい気持ちで一杯です。もしあの方が戻って来られたら……」

「では今日の夕方、わたしは改めて友人の女性と一緒に自宅に伺いたいと思いますが、よろしいでしょうか？突然のことですから少し日を置いたほうがいいですか？」

「いいえ、今日で結構です。わたくしは毎日何もすることがありません。内観さんとお友達がいらして下さったら、心の空虚さが埋められます。是非いらしてください。お待ちしております。それに、夕食も一緒にしてくださいと嬉しいのですが……」

「それは、申し訳ないので……」

「いいえ、そうして頂きたいのです。お願いします」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて6時頃に伺わせて頂きます」

賢は大河原早苗の家を出た。かれこれ1時間ほどが経過していた。亜希子が待ちくたびれているだろうと思った。賢は途中でデパートに寄って、婦人靴とソックスを買った。靴のサイズは頭に浮かんだサイズを指定した。ホテルに着いてエントランスを入ると、亜希子が駆け寄って来た。だぶだぶの男もののシャツとジャケット、足が隠れるほどのパンツを穿いている亜希子は、兄の服を着て喜んでいる幼子のように可愛かった。

「お帰りなさい、あなた。大河原早苗さんにお会いできましたか？」

「うん、いろいろ話してくれたよ。鹿島さんが言っていた通りだった。

亜希子、先ずこの靴を履けよ。スリッパじゃ行けないしな」

「まあ、素敵なお靴！わたくしこういう靴がほしかったの。うれしい」

靴は図ったようにぴたりと亜希子の足に合った。亜希子はますます嬉しくなった。

「今日の夕方一緒に大河原さんの家に行ってくれるか？夜、女性一人切りの家に伺う訳にはいかないからな。それに……」

「はい、一緒させて頂きますわ。わたくし、あなたが連れて行って下さる処ならどこにでも附いて行きます。一緒に居られるだけで、それだけ

で十分ですわ」

「それじゃ、今から近くのデパートに出掛けよう。亜希子に似合う服を俺がプレゼントしてやるよ」

亜希子の顔が綻んだ。その微笑みはずっと消えずに亜希子の顔に残っていて、ふたりがデパートの婦人服売り場に着いた時にもまだ亜希子の顔は輝いていた。賢は亜希子に好きな服を選んでいいと言ったが、亜希子は下着を自分で選ぶのでブラウスやセーターは賢に選んでほしいと言った。賢は亜希子に明るい色の服を着て欲しかった。薄いピンクのブラウスと濃いブラウンのスカート、その上に着る大きな襟の^{えんじ}騰脂のニットのセーターを選んだ。試着した亜希子は賢にその姿を見せた。賢はとても美しいと思った。いつもの清楚さに、嬉しそうにはにかんでいる姿が色めかしさを加えていた。賢は支払いを済ますと、コート売り場に行った。コートは値段が張った。亜希子はバーゲン品として展示されている黒のハーフ・ダウンコートを選んだ。値段は安かったが、亜希子には似合った。更に賢は手袋、マフラーまで買って与えた。亜希子は進んで特価品を選んだ。一通り衣類が揃ったので、ふたりは一旦ホテルに戻った。部屋に入ると亜希子は直ぐに服を着替えた。賢は亜希子の脱いだ自分の服をトラベルバッグに押し込んだ。亜希子はクローゼットの裏に附いている姿見の前で、いろいろなポーズを取って自分の姿を写していた。

「あなた、いかがですか？似合うかしら」

「うん、なかなかいいよ」

賢が近付くと、亜希子は賢の前でポーズを取って見せた。賢は微笑みながら亜希子の額に軽く口付けした。

「できるだけ早く青山に戻らなくちゃな」

亜希子は賢の胸に顔を埋めて頷いた。ふたりはホテルを出たが、まだ時間があるので駅前を歩いてみることにした。雪は止んでいた。太陽が出ていたが、辺りに漲った初冬の寒さが照り返す日差しの温もりをも冷やしてしまっていた。

「亜希子、寒くないか？」

「とても暖かいわ。わたくしは大丈夫です。それより、あなたはそのジ

ジャケットだけで大丈夫ですか？」

「うん、寒いけどもう慣れたよ。遠野からずっとこの格好だから」

「あなた、腕を組んでもよろしいかしら」

「うん」

亜希子は賢の左手に自分の右手を絡めた。ふたりの吐く息が白く空中で混じるように消えてゆくのが亜希子には嬉しかった。ふたりは連絡船の波止場の方に向かって歩いて行った。この道をどれほどの人たちが行き来したことだろう。北海道に向かう唯一の玄関口だった頃の情景が見えるようだった。

「わたくし離れた場所のものが見えることがあるのよ。昨日のあなたもそう。特に自分が考えているわけではないのに、ある場面が見えたりするの。それも夢のようなものではなくて、本当に起こっていることが多いのよ」

「ふうーん、それは透視だな。やはり亜希子は半分虚次元に入っているんだな。時間も空間も関係無くなる部分とこの3次元世界の出来事が、亜希子の中では重なって起こっているんだ。亜希子の脳がそれを解釈できるんだな。おれにもそういうことが起こるけど、それはよほど意識が澄み切っていて集中した時だけだ。亜希子、今北海道の連絡船の波止場を見ることができるか？」

「少しやってみます。見えると言っても、直感のような感覚に従って自分で頭の中に映像を描いているような感じですけど」

ふたりは波止場までやって来た。誰もいない波止場で、亜希子は暫し海を見つめていたがやがてゆっくりと半眼になった。その姿は、賢が以前一人で奈良を訪れた時、一目見て感動のあまり暫く拝殿の前に釘付けになってしまった中宮寺本堂の如意輪観世音菩薩半跏像の様な印章を与えた。

「ええ、見えます。丁度波止場に連絡船が着くところです。北海道は雪が降っているようです。2、3人の人が波止場の船着き場に向かって走っています。いま船が埠頭に着いたところです。渡し板が掛けられています。さっき走って来た人たちが渡し板を飛び越えるように船の中に入

って行きました。人々が船から下りて来ます・・・どンドン降りて来ています・・・」

「亜希子、凄くないか！透視ができるんだな」

「でも、はっきり姿を見ることができるのは、そこに意識を集中した時だけです。特に強く意識しない時は、全体の情景がぼうっとしていて走馬燈のように展開しているだけです。細部は見えません」

「冷えてきたね。そろそろ大河原早苗さんの所に伺おうか？」

「はい」

ふたりが大河原家を訪問したのは6時を5分ほど回った頃だった。手みやげにマスクメロンを2つ買って持参した。早苗はふたりを待ち兼ねているようだった。賢は先ず亜希子を紹介した。青森の冬はこんなに寒いのかとふたりに思わせるほど外は冷え込んでいたが、居間に通されると、ふたりはその温もりに身体の緊張が解けてゆくのを感じた。居間の仏壇には蠟燭の火が灯されていた。亜希子が黒のコートを脱ぐと、臙脂のセーターに包まれた身体の線が浮き出た。亜希子は黙って仏壇に近付き両手を合わせた。

「もう1年になります。あの日も今日のようにしばれる日でしたのよ。わたくしは身体が凍り付きました。身体が動かなくなってしまって・・・絶望の限界を超えると、身体もこの世に止まりたくなくなってしまうのでしょうか？身体中の血が、流れるのを止めたようでした。涙も流れません。一緒に逝きたいと思いました。警察の方々や親戚、隣組の人たちが全ての面倒をみてくださいました。わたくしは意識を失ったような状態で、気が付いた時には葬式も済んで親戚の人たちも帰り、京都の母とふたり切りになっていました。それまでのことは思い出そうとしても断片しか思い出せません。京都の母はついこの間まで一緒に居てくれたのですが、わたくしが一人でも生きられるようになった為でしょう、一旦京都に戻りました。今後の身の振り方をどうするか決めようと思っているところなのですよ・・・さあ、夕御飯に致しましょう。青森の冬は寒いので鍋料理に致しました。よろしいですか？」

「それはありがたいです。外は寒くて、ここに来てやっと少し暖まって

きたところですよ。鍋料理は何よりの御馳走です」

「わたくしにも何かお手伝いさせて頂けますか？」

「ありがとうございます。それでは、遠慮無くお願いしますが、炬燵の上にお鍋を運ぶのを手伝って頂けますか？」

早苗と亜希子は夕食の支度に掛かった。賢はジャケットを脱いで横に置くと、仏壇に線香を上げて暫くの間瞑目した。思考を止め意識を内側に向けると早苗の義母のイメージが浮き上がってきて背筋に冷たいものを感じた。賢は意識を亜希子の方向に切り替えて瞑目を解いた。早苗に今すぐ竹下を召還させるのは危険かも知れないと感じた。少なくとも亡くなった義母の意識をこの場所から切り離す必要があると思った。食事の支度は直ぐに調った。早苗が事前に準備していたようだ。亜希子は用意された料理を炬燵のテーブルに並べるのを手伝うだけで済んだ。既に煮込んである土鍋が卓上コンロに掛けられた。

「石狩鍋にしてみました。こういう日は味噌鍋が温まるのよ。さあ、召し上がってください」

炬燵を囲んで鍋に箸を入れると、三人はずっと身近な関係になったような気がしてきた。

「皆でお鍋を頂くなんて久しぶりだわ。青森の冬は寒いよ。お鍋が一番ね」

早苗の声は弾んでいる。早苗は先ず賢の取り皿に鮭や野菜を盛って賢に手渡した。そして、亜希子の取り皿にも同じように具を盛ってくれた。

「あの子達もお鍋は大好きだったのよ。いつも主人が留守だったでしょう。そういう時はお鍋がいいのよ、わいわい話しながら食べると寂しさも忘れてしまうのよね。でも……もう、2度と一緒に食事もできないのね。義母もお鍋は好きだったわ。義母とは初めはじっくりいかなかったけど、子供が生まれた頃から少しずつ打ち解けていったの。主人の大阪への単身赴任が破滅への序章だったのね。それまでは優しい父親だったのに、大阪で蔓木元子という女性に拘わってからあの人変わっちゃったのよ。それまでは毎週日曜日に電話が掛かってきていたのに、その頃からぷつぷつ電話も無くなって、挙げ句の果てが家族をみんな失っ

てしまう結果だなんて・・・」

早苗は呟くように言って言葉を切った。

「お一人でいらっしゃるのをお辛いでしょうね」

「わたくしもう京都に戻ろうかと思っているの。主人と別れちゃおうかって思っているの。もうここにいる理由も無くなってしまったし。唯辛いだけですから」

「竹下さんはこちらに来られたことはあるのですか？」

「あの方は、わたくしが暴力団の男に脅されていると知った後直ぐに1度見えましたが、でも、又直ぐに戻られました。その時はたまたま主人も戻って来ていて、わたくしと主人と竹下さんが居間で顔を合わせた時、主人との間で気まずい雰囲気になってしまったようで、わたくしのことを心配してくださりながら大阪に戻って行かれました。その後も何度か電話をしてくださりました。わたくしは随分元気付けられました。それがどうした訳か突然失踪してしまわれて・・・竹下さんのくださった励ましの言葉と優しさを思い出して悲しみを乗り越えました。竹下さんがいてくださらなかったらわたくしは生きていなかったと思います」

「ここに来た後、竹下さんはあなたが暴力団の男に連れ廻されている車の中に現われた訳ですね。そして失踪してしまっただけです」

「ええ、今思い出すと確かに竹下さんでした。でも、竹下さんが現われた瞬間は彼だと思いませんでした。何か怖ろしい幽霊が現われたような気がしました。わたくしは悲鳴を上げました。暴力団の栗原もバックミラーでその姿を見たのでしょ、急ブレーキを掛けて停車しました。あんな悪い奴なのに案外意気地が無いんです。顔色が真っ青になって手が震えていました。わたくしも恐怖に捕らわれて、車から転げ出るように逃げ出しました。その後のことは分かりません。わたくしがタクシーを拾って家に帰ると、義母も子供達もいませんでした。デパートに買い物に出掛けたことを知っていましたから、そのうち帰って来るだろうと思っていました。でも、9時を過ぎても帰って来ませんでした。それで、直ぐに警察に電話したのです。警察と隣組の人たちが夜を徹して探してくださいました。明け方になって、高山の山中で見付かったのです。あ

の車が竹下さんのものだったことと、竹下さんのコートが車の中にあった為、警察はあらゆる可能性を調査したようです。しかし、警察がどんなに調べても竹下さんが犯人である可能性は無くなりました。竹下さんが二人いるんじゃないか何てことを言う人まで現れたほどです。結局警察はその後、継続調査ができなくなってしまったのです。だって、竹下さんは事件の起こるほんの少し前まで大阪にいたのですから」

炬燵の上の鍋は、ぐつぐつと音を立てて煮立ってきた。早苗はたまを手にするると鍋の底を掬うようにして具を掻き混ぜた。一瞬沸騰が止まったが直ぐ又煮立ってきた。早苗はコンロの火を少し弱めながら言った。

「^{はは}義母はしょっぱりだったのよ。凍えるようなしばれる天候の中でも耐え抜いて生きて来たのね。どんなことがあっても負けなかったはずよ。だからわたくしが脅迫を受けていると分かった途端、あの暴力団の男の脅しに真っ向から立ち向かったのよ。わたくしがもっと強かったら、義母にもっと依存していたら、こんな結末にはならなかったと思うわ。心のどこかに「義母には知られたくない」って気持ちがあったのよ。だんだん泥沼に引きずり込まれて行くと、益々義母には知られてはならないという思いが強くなっていったのよ」

「そんなとき、竹下さんが救いの手を差し伸べてくれたのですね」

賢の質問に応答するように早苗は話し続けた。

「恥ずかしい話ですけど、わたくしも寂しかったのだと思います。悪い奴だと分かっているけど心の奥底にあの暴力団の男を待っているような部分があったのです。そんな自分が許せなかったけど、主人が離れて行ってしまい、損害賠償という言葉に追い詰められて抜け道が無くなった時、あの男に弄ばれると肉体的な快樂に心を奪われてしまいました。だからわたくしは一生ここで罪の償いをして生きるつもりだったのです・・・さあ、どんどん召し上がってください・・・でも、竹下さんが「自分を偽ったり、逃げたりせずに、目の前に顕れた事象に勇氣を持って立ち向かうように」と教えてくださったのです。あの事件の少し前です。竹下さんはここに来られたとき、わたくしの為^に涙を流してくださいました。不思議ですね、それまでは肉体的に逞しくて、顔かたちが

整っていて、声の太い主人のような男がとても男らしく思っていたのですが、わたくしの為に仕事を休んではるばる大阪から駆け付け、わたくしの為に涙を流してくださる竹下さんの姿を見た途端、彼の懷に抱かれたような感覚がしてとても安心できたのです。この人は何て男らしいのだろうと思ったのです。それは言葉では説明できない感覚でした。主人より体格も、風貌も、声も決して勝っているとは言えない竹下さんが理想的な男性に見えてきました。彼はわたくしのことだけを考えていてくれました。わたくしは目で見た印象と、耳で聞いた声と、心で思い描いた男性像に翻弄されていたのです。何と情けないことでしょう。あの時のわたくしは家族のことも顧みずに、自分の苦しみから逃れることのみで必死でした。子供達もわたくしの虚ろな状態を見ていつしか義母に頼るようになっていました。今思うと何と可哀想なことをしてしまったのかと悔やんでも悔やみ切れません」

早苗の頬を涙が伝わって落ちた。賢が口に含んでいたものを飲み込んでから言った。

「竹下さんがあなたにおっしゃったことは、僕たちが理想の生き方として目指していることです」

「それはどういうことですか？勇気を出せと言うことですか？」

「はい、僕たちはあなたと同じように、いつも周りで起こる事象からの影響を受けて翻弄されて生きているのです。それは心が周りの物に気を取られてあれこれ考えてしまうからです。だから考えた通りに行動すると、本当に自分が欲している様な行動をとることができないのです。心は自分の受けた感覚や、今までの経験や、今後の期待に基づいて思考を行うのです。だから、いろいろな事象が顕れてきた時、今までの経験で「ああでもない」「こうでもない」と考え、勝手に判断をしてしまうのです。本当は自分が望んでいないことをやってしまうのです。具体的に言うと、あなたが今おっしゃったような、暴力団員栗原のことも、あなたは「逆らったら何をされるか知れない。こわい、賠償金を支払わなくて済むようにしたい」という思考が、本当の自分の「こんな男の言うことは撥ね付けなければいけない」という意識を覆い隠して思考に従って

行動してしまったのです。思考に惑わされると、自分自身の意識に従って行えたはずの行為との間の矛盾の為に、苦しみが生じてくるのです。だから、自分が感じたことについて考え過ぎないことです。心に感じたことに従って行動するようにすべきなのです」

それを聞いていた亜希子が早苗に向かって言った。

「わたくしも早苗さんと同じように、賢さんから自分の意識に従って生きるように忠告を頂きました。賢さんのおかげで、今では自分の行う行動とその結果に迷いを感じなくなりました」

「亜希子はだいたい自分の意識に従って行動していると思うよ。早苗さん、これはかなり難しいことかも知れないけど、思考はまるで空に浮かぶ雲のように捉えどころが無く、浮かんだと思えば消えるといった、いつも揺れ動いているものなのです。その思考に惑わされては本当の生き方ができないと思うのです。もっと分かり易い例で言うと、僕たちは自分の身体のことは何も知らないのに、それを自由に動かそうとする。本当は思考が自由に身体を動かせるのではなくて、意識が作用して動かしているのです。意識は細胞の一つ一つと通信を行うことができます。その意識の作用に干渉するのが思考です。純粋な意識はあらゆる行動の選択において、誤りを犯すことはあり得ないのです。ですから、自分が厭なときは行動しないこと、真の喜びを感じるようなら行動に移ると決めたらいいのです。竹下さんはそのことを言っていたのだと思います。そして、そのような生き方が人間本来の生き方だと思うのです。大昔の人たちは大抵そのようにして生きていたようです」

「少し難しそうですけど、わたくしも決心致しました。今では竹下さんの言葉に従って生きようと思います。竹下さんは主人を蔓木元子さんから遠ざけようと努力してくださいました。わたしはもう2度とあのような悪い男の言う通りにはなりません。勇気を持って立ち向かいます」

「昨日も申し上げましたが、わたくしたちは竹下さんと呼び戻す為に伺ったのです。でも、あなたの意識が、思考に揺られて不安定になっている間は、竹下さんが危険な状態に陥る可能性がありますから帰還の為に瞑想を行うことは難しいと思います。それに、お義母さんの意識がまだ

この場所に惹かれていてここに繋がっているようなので、それもあまり好ましくありません。ですから、今日はお義母さんの意識を解放させることと、あなたの意識の方向を明確に定めることに努めましょう。わたくしたちも協力します」

「^{はは}義母はまだ彷徨っているのでしょうか？」

「はい、意識の一部が残っている — もっと正確に言うと、意識の投影された存在がこの場所にしがみついていると言った方がいいと思います。お義母さん自身ではないのですが、人間の思考と同じようなものですから執着から解放させることはできると思います」

「と言うことは、義母は成仏できていないので先ず成仏させなくてはならないということですか？」

「はい、仏教的に謂うとそういうことです。それに、この辺りに意識が残っているということは、家の中かこの近辺で殺されたのじゃないかと思うのです」

「義母はよく、仏壇の前でお経を唱えていました。特に般若心経は朝晩必ず読誦していました」

「お義母さんはお経の内容を理解していたようですか？」

「いいえ、お寺の和尚さんから「この経を朝晩唱えれば救われる」と教えて頂いていたようです。でも、こんな結果になってしまいました」

「分かりました。食事を頂いたら、少し時間を置いてからお義母さんの意識に向かって般若心経の意味を伝えます」

「賢さん、意味が分かるのですか？」

「はい、内容的には難しくはありません。このお経は現世のことを説明しているだけです。しかし、この世界は僕たちが感じている世界だけではないのです。後で僕が声を出して説明しますので参考にされるといいと思います」

「分かりました・・・あら、わたくしのおしゃべりの所為で、ちっとも箸が進まないですね。さあさあ、どんどん召し上がってください」

3人は黙々と箸を運んだ。賢も亜希子も空腹だったのでよく食べた。煮詰まった具と汁を少し残して鍋はほとんど空になった。早苗は皿に盛ら

れた^{うどん}餛飩を鍋に入れて汁を足し、かき混ぜてから3つの小鉢に分けた。

「本当に美味しいですね。身体が芯から温まります」

「とても美味しいですわ。石狩鍋はこちらでもよく頂くのですか？」

「ええ、青森はとつてもしばれるから、いろいろな鍋を試してみるんです。でも味噌鍋が一番温まりますね」

食事が済むと、亜希子は早苗と共に立って後片付けをした。賢は般若心経の経本を早苗から借りて一通り目を通した。後片付けが済むと早苗はプラスチックの^{ざる}笊に入れた蜜柑を持って来て炬燵卓の上に置き、再び立って奥の部屋に入って行き、2冊のアルバムを持参して戻って来た。早苗はアルバムを開いて賢と亜希子に説明を始めた。台所に通じる入り口に近い位置に早苗が座り、その右隣に賢が座った。亜希子は早苗と向かい合って座っていたが、早苗がアルバムを広げて説明を始めるとその席を立て賢の右肩越しに覗き込むようにして話を聞いた。賢は少し早苗の方に近付き亜希子に炬燵に入るように促した。亜希子は賢に身体を寄せるようにして炬燵に足を入れた。淡い臙脂のセーターの色が、部屋の暖かさを全体に広げているようだった。早苗はふたりの娘の写っている写真の説明を始めると目に一杯涙が溜ってきた。

「ふたりとも大人しい子だったんです。この写真はわたくしがふたりを八戸のデパートに連れて行った時の写真です」

ふたりの娘はお揃いの花柄のブラウスを着て写っていた。ふたりとも笑っている。早苗は一枚一枚の写真を指さしながら説明していった。家族全員が写っている写真が出てきた。早苗が3年前の節句の時に撮った写真だと言った。賢と亜希子は義母と早苗の亭主に意識を向けた。義母は小柄なやや面長な顔立ちをした人で、少し猫背になっている。早苗が義母の名前はさとだと言った。亭主は身体つきが強健で目が大きく、鼻筋の通った精悍な顔立ちの男性だった。亜希子は賢の顔と見比べてみて微笑んだ。早苗はこの写真が家族全員で写っている唯一の写真だと言った。写真の中の全員が幸福の真っ直中にあるという印象を与えた。三人は暫くの間アルバムの写真に夢中になっていた。1時間ほどして賢が言った。「そろそろ、お義母さんの意識に語り掛けてみます。ふたりとも、僕の

話を聞いているだけで、お義母さんを意識しないようにしてください。

僕が OK と言うまで僕に話し掛けることもしないでください」

巫希子は賢から離れて元の席に戻った。早苗は姿勢を正して賢の方に視線を向けた。賢は早苗から借りた経本を繰って般若心経のページを開いてから、先ず瞑想を行った。ふたりの女性はじっと賢を見つめている。賢は半眼になって意識を義母に向けた。直ぐに義母のイメージが脳裏に浮かんできた。義母は苦痛に満ちた蒼白な顔をしていた。賢は思考を止め、抑揚を抑えた声で義母にゆっくりと語り掛けた。ふたりの女性にはその声がまるで読経の様に響いた。

「さとさん、わたくしの言葉が聞こえますか？あなたは既にお亡くなりになっています。あなたの身体はもうここにはありません。あなたの心だけが彷徨っているのです。あなたは元いたところに戻ってゆかなくてはいけません。多くの喜びに満ちた存在があなたを待っています。とても素晴らしい処なのですよ。まず、あなたは自分が既にこの世界では死んでしまったことを理解してください。でも、命がそのまま無くならなかったことを知ってください。そして、ここに居たいと思う気持ちを捨ててください。それは執着と謂って、あなたが本来の自分に戻る時の足枷になります。今、ここには早苗さんもいらっしゃって、あなたが心穏やかに旅立たれることを願っています。こちらにいる者は皆、あなたの生前の勇敢さに敬服し、優しさに感謝しています。今からあなたが毎日読誦なさっていた般若心経を読みますので、穏やかな心で聞いてください・・・・・・・・摩訶般若波羅蜜多心経 観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不異色 色即是空 空即是色 受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢不淨 不增不減 是故空中無色 無受想行識 無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界 乃至無意識界 無無明 亦無無明尽 乃至無老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得 以無所得 故菩提薩埵 依般若波羅蜜多 故心無罣礙 無罣礙 故無有恐怖 遠離一切顛倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅蜜多 故得阿耨多羅三藐三菩提 故知般若波羅蜜多 是大神呪 是大明呪 是無上呪 是無等等呪 能除一切

苦 真実不虛 故説般若波羅蜜多呪 即説呪日 羯諦 羯諦 波羅羯諦
波羅僧羯諦 菩提薩婆訶 般若心經・・・あなたの大切にしてお
られた般若心經の意味と功徳を分かりやすく説明させていただきます。よく
理解してください・・・わたくしはこのように理解しています。お釈
迦様が大量の弟子達や菩薩様達と共にいらっしゃった時、お釈迦様は深
い悟りの瞑想に入られました。その時、全てを見通すことのおできになる
観自在力を持った観音さまが般若波羅蜜多という”深淵な智慧の完成”
の修行をされていらっしゃいましたが、全てを見極めて、お釈迦様の
10大弟子の一人であられるシャーリープトラ様に向かって仰いました。
「わたくしたちの身体や、あらゆる物体、それを感じ取る感覚、そ
してその受け取った感覚によって起こる想念、その想念から思い描くイ
メージ、その思い描いたイメージについて意識すること、これらの5つ
の人間が関係する要素は、全て実体の無いものなのだよ、シャーリー
プトラよ。だからそれらに捕らわれて苦しむことは止めなさい」と仰いま
した。観音様は続けてもっと詳しく説明します。「わたくしたちの身体
や物質はこの空間と同じなんだよ。ものを極微まで追跡すると、実体は
何もなくて、唯エネルギーが振動しているだけだということが分かるの
だよ。そして、この何も無い様に思える空間も実は身体や物質と同じも
のなのだよ。だから、身体や物質について感じたり、思ったり、認識し
たりしていることも、同じように実体が無いことなのだよ、シャーリー
プトラよ。この常に^{ことわり}変化している現実世界を司っているあらゆる理は
実体がないものなのだよ。変化しているが故に存在しているように見え
るのだよ。実体は別に在って全ての人に共通に存在していて、永遠不変
のものなのだよ。新たに生じることも無ければ、それが消えることも無
く、汚いということも無ければ、きれいということも無く、増えるとい
うことも無ければ、減るということも無いのだよ。だから、この空間に
は実体のある身体や物体というようなものは何も存在しないんだよ。こ
の世界は実体の世界を映した映像のような世界なのだよ。感覚や思考も
実体を写したもので、本当は身体や物質について感じたり、想起したり、
思ったり、認識したりすること自体が無いのだよ。この世界に生きてい

る人間の感覚器官、眼、耳、鼻、舌、触覚も、意識さえも無いのだよ。その感覚器官を通して受け取られる、形態、音、香り、味、触れた感じ、それらを司る法則も無いのだよ。目で見える世界から、意識する世界まで総て無いのだよ。実在の世界が別にあるのだから、本来迷いの最初の原因である認識の間違いのようなものは存在しないのだけれど、人間がこの現世界に投影されている限り、認識の間違いが無くなることも無いのだよ。同じ様に本来迷いの最後の結果である老いも死も無いけれど、現象としての老いや死が無くなることも無いのだよ。苦しみも、苦しみの原因も、苦しみが無くなることも、苦しみを無くす為の修行法も無いのだよ。修行法を知ること、修行の成果を得ることもあり得ないのだよ。だから、新たに得られるものは何も無いのだよ。総ては既に真の実在として与えられているのだから。このような境地に至った菩薩様達は“智慧の完成”によって、心に何の妨げも無いのだよ。心に妨げが無いので恐れも無いのだよ。誤った妄想を一切お持ちでないので、完全に開放された安らかな境地である真実在の世界におられるのだよ。わたくしたちの考えている過去・現在・未来を通して存在なさっている仏様は、この“智慧の完成”によって、この上なく完全に目覚められたのだよ」

・・・この悟りを表す阿耨多羅三藐三菩提という言葉は元々、お釈迦様の時代の言葉の発音を漢字で表現したと言われているけど、三藐三菩提ということは真実在の世界、実の世界、虚の世界の3つの世界のいずれについても些末なことから無限の慈悲に至るまで全てに渡って認識することなんだ。そのことを要約して完全に目覚められたと表現しているんだ・・・観音様は続けておっしゃった。「だから、“智慧の完成”の大いなる真言である呪文であって、大いなる悟りの、最高で他に比べるものもない真言であり、すべての苦しみを取り除くものであって、真実で偽りが無いので確実に効果のある呪文を述べます。それでは、“智慧の完成”の真言「智慧よ、智慧よ、完全なる智慧よ、完成された完全なる智慧よ、悟りをもたらしたまえ」という意味の真言を唱えましょう。「ガテー ガテー パーラガテー パーラサンガテー ボーディ スヴァーハー」般若心経」・・・・・・これが般若心経という“智慧の

完成”の真言の教えの意味です。この真言を唱え続けると、智慧の完成への道が開けて来ます。あなたが、この世界に生まれて来たのも、実はこの世界を通して、本当の自分を知る為だったのです。これまで、生まれ変わって、何度も苦楽をともにした人たちに巡り会い、その人達のことを思い、共に悲しみ、共に喜んで、愛の大切さを学ぶ為だったのです。こういう形を通して理解するのが、一番理解し易いのです。もう、あなたには以前の肉体がありませんから、こちらの世界を今までのように感じることはできません。あなたの心はその感じを作り出しているだけです。今、自分だと感じている身体のように思える部分に触ってご覧ください。簡単に手が通り抜けてしまうでしょう。生きていた時とは違うことが分かったでしょう。あなたの心が作り出しているのです。あなたは優しい方です。早苗さんや、息子さん、お孫さんのことを慈しんでください。この世界であなた達を殺した者や、あなたに敵対した者達への恨みの気持ちは全て水に流してください。そして、自分を生かし続けている存在に対して感謝の気持ちを抱いてください。あなたが無事に彼岸に到達できるように祈ってください。僕たちも祈ります。さあ、祈ってください・・・・・・・・」

賢は半眼のまま祈りを続けた。やがて、賢の脳裏に浮かんでいたさとの顔が淡いピンク色に変わってきて、口元に微笑みが浮かんできた。さとは賢の方を向いて深々と頭を下げた。そして、すーっと遠ざかってゆくと、遙か彼方で光が輝き賢の脳裏から消えた。賢は静かに眼を明けた。早苗の顔が涙でぐしゃぐしゃになっていた。亜希子も眼に涙を浮かべていた。

「お義母さんは、漸く旅立たれました。苦しみから解放されてとても穏やかな顔でしたよ。もう大丈夫です。早苗さん、後はあなたの心を安定させることです」

早苗が顔を伏せ右手のセーターの袖で涙を拭った。賢がポケットからハンカチを出して早苗に渡した。早苗は恥ずかしそうにハンカチを受け取ると暫く両方の目頭を押さえていたが、やがて顔を上げて言った。

「内観さん、ありがとうございます。感動で身体が震えました。涙が

止まりません。本当にありがとうございました」

亜希子が言った。

「あなた、わたくしも感動致しました。とても分かりやすく、わたくしにも理解できました」

「無事に済んだね。一番心配なことだったのだけど、うまく行って良かった。少し休憩しよう」

早苗が台所に立って、お茶を入れて来た。盆を炬燵の卓上に置き、湯呑みの一つ手に取り先ず賢のところに置いた。次ぎに亜希子の前と自分の前に置いてから、盆を卓上から降ろして自分の左膝の横に置きながら言った。

「外は雪になってきました。この分だと、大分積もるでしょう」

「この辺りは沢山積もるのですか？」

「酷い時は雪降ろしをしないと、屋根が落ちてしまいます。雪が降り続くようでしたら、早めに戻られた方がよろしいわ」

賢は湯飲みの茶を啜ってから言った。

「それじゃあ早苗さん、心の安定に挑戦してみましよう」

「はい、どうすればよいのでしょうか？」

「まず、今気になっていることを、メモ用紙に書き出してみてください」
早苗は立って仏壇のところに行き引き出しから手帳とペンを取って来た。元の場所に座ると手帳を開き、そこにいきなり書き付け始めた。

義母のこと 申し訳なかったと思っている 申し訳ありませんでした。

子供達のこと 可哀想なことをしたと思っている。 ごめんなさい。

主人のこと なぜ、わたくしたちから遠ざかったのかしら。

竹下さんのこと わたしのことを思ってくださっている。 ありがとう。

暴力団員栗原のこと 憎んでも憎みきれない。嫌悪感を覚える。 自責の念。

蔓木元子のこと わたくしたちの家庭を破壊した女 憎い

これからのこと ここに住むか、京都の実家に帰るか、迷っている。

生活費のこと 貯金も底を突いてきた。これからどうしようか？

自分のこと このまま、生きていることが許されるのだろうか？

早苗はそこまで書くと、ペンを持ったまま考え込んでしまった。メモを覗き込みながら、賢が言った。

「早苗さん、ここに書いてあることを一つずつ、あなたの心から消してゆきましょう。まず、お義母さんはもうあなたのことを許していると思います。ですから、自責の念を捨てて感謝の思いに切り替えてください」

「思うだけでいいのですか？」

「初めは思うだけで結構ですが、感謝の心に切り替わったら、その思いも捨ててください」

早苗は暫く瞑目していたが、やがて静かに目を開けて、今は義母のことを切り離せたと言った。賢は次に子供達について話した。

「ふたりの娘さんは既に、ここにはおりません。生前の一番楽しかった時のことを思い出してください。心の苦しみをその楽しかった時の思いに切り替えてください。娘さん達に対する愛の心を広げてください。慚愧の念は切り捨ててください。あなたと娘さんは今同じ世界にいます。心の中でふたりを抱き締めてあげてください。そして、あなたの心が娘さん達への愛情で満たされたら、その思いも捨ててください」

早苗は暫く瞑目していたが、目尻から涙が溢れ出てきた。やがて涙が止まり、目を開けると、

「娘達に対する思いも捨てました」

と言った。賢は次に亭主について話した。

「ご主人については、全て許してあげてください。そして、今は心から外してください」

これはそれほど時間を掛けずに済んだ。賢は次に蔓木元子という女性について説明した。

「蔓木元子さんについては、忘れてください。元々そんな人は存在しなかったと考えてください」

早苗は直ぐに、蔓木元子を切り捨てることができたと言った。賢は竹下を飛ばして暴力団の男栗原について話した。

「あなたが苦しんでいる元凶であるこの男のことを切り離すことはそう簡単にはできないと思います。あなたの憎しみと、慚愧の念を払拭しないことには、竹下さんの帰還は叶わないでしょう。まず、自分を許してください。あの状況では誰でもそうせざるを得なかったのです。自分を労ってあげてください。今あなたはこの男のことを憎みこそすれ、惹かれる部分は無くなっているとおっしゃいました。そんなことは何もなかったと思ってください。そして、この犯罪者については、警察に任せましょう。家族もあなたも被害を受けたということを忘れましょう。この男のことを念頭に浮かべることすら無くしましょう。もし憎悪の気持ちが湧いてきたらその気持ちを捨てて、あなたの一番好きな食べ物のことを思ってください。それを食べている気持ちになってください」

早苗は暫く瞑目していたが、どうしても憎しみの感情が湧いてきてしまうと云った。賢は「それは仕方のないことだから、あまりこだわらない方がいい、今夜一晩努力するように」と云った。最後に賢は早苗を労るように云った。

「早苗さん、今あなたは本来の自分に戻りつつあります。あなたの心の不安定さも大分解消されました。あなたは元々優しい方です。外側から来るものに影響されなくて、本来の優しさを心の中一杯に広げるようにしてください。今晚一晩、心に引っ掛っている人や物事を全て片付けて捨ててください。わたくしたちは明日の午前中に伺いますから、そこで竹下さんを呼び戻すことに挑戦してみましよう」

「分かりました。努力してみます」

「亜希子、それじゃそろそろ失礼しようか？」

賢はジャケットを着ると亜希子がコートを着るのを助け、夕食の礼を言っただけで早苗の家を出た。早苗が送ってゆくと言ったが、賢はそれを断った。家に戻る早苗のことが心配だった。雪が激しく降っていた。幸い風が無かったので辛くなるほどの寒さは感じなかった。辺り一面雪が積もっていて辛うじて道路の位置が分かるほどだった。一足ごとにふたりの足は膝下あたりまで雪に埋もれた。賢は亜希子の右手を引いて一步一步進んだ。街灯の光が雪の上に映ったふたりの陰を右に、左にと揺らせている。

ふたりの他には誰も歩いていなかった。

「亜希子大丈夫か？寒くないか？」

「大丈夫よ。あなたと一緒にだもの」

「早苗さん、心が大分安定してきたな」

「はい、随分穏やかな感じになられたわ。あなたのことますます尊敬してしまいました」

「亜希子がいてくれたおかげでバランスをとることができたよ。君の存在はとても大きい」

「そう言って頂けてとっても嬉しいわ。あなた、あの阿耨多羅三藐三菩提という言葉の意味を、もう一度説明して頂けないかしら？」

「うん、阿耨多羅三藐三菩提という言葉は元々悟りを表す表現に使われたようで、後々サンスクリットの発音を漢字で表現したと言われているけど、どうも、「この上ないほど完全に悟る」と訳しても、意味がはっきり分からないだろう。だから漢字の意味の中にそれを含まようとしたんじゃないかな。当時の覚者も3つの世界があることを認識していて、三藐三菩提と言う言葉で「真実の世界、現実の世界、虚の世界の3つの世界のいずれについても些末なことから無限の慈悲に至るまで全てに渡って認識する」と表現したんだと思うんだ。そう言っても一般の人にはよく分からないので、そのことを要約して「この上なく完全に目覚められた」と意識しているんだと思う」

「わたくし、この人生で何をしようとしているのかしら」

「亜希子は俺に再会した時、一生人の為に生きてゆきたいって言ってたよな。君の目的はそれじゃないか？」

「そうです、あなたと一緒にね。でも、あなたはさっき自分とは一体誰なのかを知ることが人生の目的だって言っていたでしょ」

「そうだよ。だけど自分は一体誰だろうといくら追求しても、分からない。答えは自分の目指そうとしていることの中にあるんだと思うよ。最も惹かれるものだよ。自分と、その目標と、その目標を達成する為の行動が一体となって、初めて自分が誰かということが理解できるんじゃないかな」

「やっと理解できました。あなたがさっきおっしゃったことが分かりました。わたくしはあなたを愛しています。このあなたを愛する行為と、愛するわたくしと、愛とが一つになったときわたくし自身が分かってくるのね」

「うん、本当は簡単なことさ・・・亜希子、寒くないか？そっちの手を出してごらん」

ふたりは歩を休めて立ち止まった。賢は亜希子の差し出した左手を自分の右手で握った。手袋をしていた為か、亜希子の手を多少暖かく感じたが、その手の甲を手袋の上から擦って暖めた。亜希子はむしろ賢の掌を冷たいと感じたが賢の為に任せてじっとしていた。嬉しかった。ふたりはやっとの思いで野内駅に辿り着いた。駅の近くの道路には車の轍があり、雪が解けて水を含んでいた。ふたりは足が濡れないように注意しながら駅の構内に向かおうとした。その時亜希子が不意に足を滑らせて尻餅を着いた。賢は咄嗟に握っていた亜希子の左手を引いたが、自分も亜希子の上に覆い被さるように転倒してしまった。亜希子の右手が溶け出している氷水に浸かった。コートも水浸しになった。賢は急いで亜希子を抱き起こすと、ポケットからハンカチを取り出し亜希子の右手の手袋を外して拭い、腰回りの水に浸かってしまった部分を拭った。

「怪我は無かったか？」

「はい、でも、とっても冷たかったわ」

賢は亜希子の手を引いて駅の改札口近くにある自動販売機で温かい飲み物を買おうとしたが、全て売り切れていた。賢は亜希子の右手を自分の懐に入れて暖めた。駅の時計は午後8時少し前を示していた。ふたりはじっと佇んで電車を待った。身体が芯まで冷えている。亜希子は時々震えが襲って来て両手に息を吹きかけて暖めた。ホームには誰もいない。15分ほどして、賢は、震えている亜希子の身体を自分の胸に引き寄せて抱きしめた。冷たさが伝わってくる。亜希子は賢の胸に顔を埋めた。ふたりは抱き合ったまま佇んでいた。そうしているとひとりであるよりずっと暖かかった。電車が来るまで30分近く我慢をしなくてはならなかった。

ふたりがホテルに帰ったのは9時少し前だった。エントランスを入ったとき漸く救われたと思った。ふたりは急いで部屋に戻った。賢は部屋に入ると直ぐ、亜希子のコートを手袋をクローゼットのハンガーに掛けると、賢はそのまま直ぐに浴室に行き、バスタブに栓をして給湯口のコックを開けた。一瞬冷たい水が出て、外の冷気の記憶が蘇ってきたが、直ぐに熱湯が噴き出してきた。賢は少し湯を流してから温度を調節して部屋に戻った。亜希子が衣服と髪を整えていた。

「亜希子、寒かったろう。直ぐにお湯に浸かるといいよ」

「ありがとうございます・・・あなた、少しこちらを見ないでいてね」
亜希子は洗面所に行って脱衣すると、ハンドタオルを手にして浴室に入り引き戸を閉めた。鍵は掛けなかった。賢は今になって部屋の暖房がかなり強いのに気付いた。部屋は十分に暖かかった。賢は靴を脱ぐと、亜希子がベッドの横に脱ぎ捨てた靴を手にとり、部屋に供えてあるティッシュペーパーの箱から5、6枚抜き取って靴の中を拭いた。ティッシュペーパーが冷たい水を含んですぐにびしょびしょになった。賢はそれをもう一回やって水気を拭い、部屋の暖気の落ちてくる場所を探した。それは窓側の壁の下だった。そこに亜希子の靴を、踵を壁に当てて立てた。自分の靴も同じようにして亜希子の靴の横に立てた。それから賢はクローゼットに行くと亜希子のコートを調べた。裾が濡れている。賢は既に亜希子が浴室に入ったことを確認してから、洗面台の横に掛かっているハンドタオルを1枚取り、亜希子のコートの濡れている部分から水分を抜こうとした。水気はまだ手がかじか 悴むほど冷たかった。水気を拭き取って濡れたタオルを洗面台の横に置いた。震えがくるような青白く冷えた身体も、次第に赤みが戻ってきた。賢は漸く衣類を脱ぐ気になった。全て脱ぎ捨てると、ハンドタオルを手にして浴室の引き戸を開けた。明るい浴室の中で、亜希子が浴槽に身体を横たえていた。亜希子は賢の方を見て微笑んだが、慌てた風もなく何処を隠すでもなかった。白い亜希子の裸体がグレーの湯船に浮いているようだった。

「あなた・・・恥ずかしいわ」

「ごめん、すぐシャワー浴びたいと思って。それにちょっと君の様子も確認したくて……」

「あら、恥かしいわ……ごめんなさい。わたくしばかり先にお湯を頂いてしまって」

「どう、暖まってきたか？」

「ええ、とってもいい気持ちよ」

浴室は奥にバスタブがあり、その横にシャワーが設けられている。賢は亜希子に湯が掛からないように注意しながらシャワーを浴びた。生き返るような心地がした。浴室はシャワーの横に便器が設けられている。こういう作りは落ち着かないといつも賢は思う。それでも洋式のホテルにはこういう造りが多かった。シャワーを浴びて身体が温かくなると、賢は湯船に浸かっている亜希子に近づいた。美しい亜希子の身体が亜希子が腕を振って立てた小波で揺れた。乳房が湯の中で揺れているようだった。亜希子は近づいてきた裸の賢の姿に、目のやり場を失ったように、視線を逸らせた。賢は亜希子の額に軽く手を当てて熱を確認してから浴室を出た。タオルで身体を拭くと、もう一枚のタオルを身体に巻き付けた。昨日は2枚だったタオルが4枚になっている。賢はテレビのスイッチを入れ、ニュースをやっているチャンネルを探した。丁度9時のニュースを放送しているチャンネルがあった。その時、備え付けの電話が鳴った。祐子だった。

「もしもし、藤代祐子と申しますが……」

「祐子、俺だよ。いま大河原早苗さんの家から帰って来たところだ。外は雪だ」

「賢さん、やっと繋がった。スマホ、きっていたでしょう。ずっと繋がらなかったもの」

「うん、今日は早苗さんの家で瞑想的なことをしたからスマホは切っておいたんだ、ごめん」

「でもよかった、間に合ったわ。9時からのニュースの特番で「行方不明者の帰還」というタイトルの公開討論をやるらしいのよ。テレビ点けてみて……亜希子さん、どうしているかしら？一緒に早苗さんのとこ

ろに行ったの？」

「うん、彼女は大丈夫だ。大河原早苗さんの問題は殺人事件絡みだから、先ず精神的な安定状態を作らなくてはいけないんだ。今日は大河原さんの家の場に起きている荒い波動を鎮める努力をして来た。明日の午前中に竹下さんの帰還に挑戦してみるよ・・・テレビは点けたよ。今ニュースをやっているCBA局でいいんだな」

「ええ、ニュースの後の特番でやるようだよ・・・少しお母様と変わるわね」

賢は初めから祐子の近くに誰かがいることに気付いていた。

「もしもし、内観さんですか？ 亜希子のことでお手数をお掛け致します。亜希子は元気でしょうか？」

「はい、とても元気です。今日はずっと、一緒にいました。そちらに帰るまで亜希子さんと一緒に行動しますのでご安心ください」

「いつもいつもご迷惑をお掛けしますが、よろしく願い致します」

「賢さん、それじゃ又電話するわ。そちらは寒いでしょう？ 薄着だから風邪を引かないようにね」

「ありがとう、じゃあまた」

電話を切って振り向くと、身体にタオルを巻き付けた亜希子がすぐ横に座って居た。濡れた髪が胸まで垂れている。

「どなたからの電話ですか？」

「祐子と君たちのお母さんからだ。少ししたらご両親に電話するといいよ」

「はい」

賢が亜希子の肩に手を触れると、亜希子は賢に身を寄せた。賢は亜希子を抱き寄せて口づけをした。亜希子は黙って目を閉じた。テレビのニュースキャスターが騒々しく解説をしていたが、その声はふたりの耳には届かなかった。湯から上がったばかりの亜希子の身体は温かかった。亜希子は賢の身体が冷えた岩のように感じられた。

「あなたを愛しているわたくしがいて、愛があって、あなたを愛していて・・・わたくしを愛してくださるあなたがいらして、愛があって、

わたくしを愛してくださっていて……でも、愛されていると考えることはないわ。ただ、魂が喜びで打ち震えているような感じなの。体が無くなってしまったような感じ」

「このまましばらくの間瞑想していよう。自分という存在を忘れてしまいうまで……」

ふたりは無言で強く抱き合った。賢は直ぐに瞑想状態に入った。亜希子の頭には既に何も浮かんでこなくなった。二人の意識は完全に同調したようだった。高波のように快感がふたりを襲ってきて、また引いて行った。ふたりは次第に此处に居るという意識が薄れてきた。唯歓喜だけがそこにあるようで、意識は無限に広がる空のような至福を捉えていた。ふたりは暫くその至福の中に留まっていた。けたたましい電話のベルの音でふたりの意識が戻った。亜希子を抱きしめた状態のまま賢は手を伸ばし受話器を取った。登紀子からだった。

「もしもし、亜希子、もしもし」

賢は無言で、亜希子に受話器を渡した。

「おかあさま、はい、亜希子です。わたくしは大丈夫です。賢さんに優しくして頂いていますのでわたくしは幸せです。おかあさま、そちらは如何ですか？」

「こちらは変わらないわよ。それより、あなたのことどうしているか心配で電話したのよ。さっき内観さんともお話させて頂いたわ。衣類はどうしたの？」

「賢さんに買って頂きました。賢さんがわたくしを労ってくださるのでとても幸せです」

「そう、それじゃ賢さんによろしく申し上げてね。何かあったら直ぐに連絡するのよ」

亜希子が渡してよこした受話器を賢は手を伸ばして電話機に戻した。

ふたりは再び強く抱き合った。賢は亜希子を思い切り抱きしめた。亜希子も腕に力を込めた。その時突然賢の耳に麻子の声が聞こえた。賢ははっとした。そしてすぐにテレビからの声だと気が付いた。ふたりは静かに離れた。賢がテレビに眼を移すと、そこには麻子の姿が映し出されて

いた。麻子が司会者の質問に答えているようだった。

「わたくしは、失踪からの帰還の鍵は愛だと思っています。強い愛の力で引き合うと、どんな遠くに行ってしまった人も引き寄せることができるのだと思います」

司会者の男が質問をしている。

「それでは、あなたの娘さん愛子さんの場合もそうだったとおっしゃるのですね」

「ええ、愛子はわたくしたち夫婦に対して強い愛情を抱いていました。わたくしたちの方がそれに答えていなかったのです。でも、愛子が帰還する時わたくしは愛子に対して強い愛情を注ぎました。というよりそういう状態になりました。その結果、愛子がこの世界に帰還できたのだと思います」

「でも、あなたはあの後すぐにご主人と離婚されてしまいました。夫婦の間に強い愛情が無くてもそれが可能なのでしょうか？」

「わたくしにもよく分かりませんが、愛情はエネルギーみたいなものだと感じています。初めは自分が誰かを愛しているとか、自分が誰かに愛されているという意識がありますが、愛が強まってくると、愛している自分と、自分が愛している相手との区別がつかなくなってしまいます。そして、更に自分も相手も無くなったようになって、だだ愛情の中に浸っているという意識だけになって、最後には意識というより愛そのものになったような感じになってしまいます。一種の自己喪失よろこびです。唯、歓喜だけがあるような感じですか。わたくしが愛子を呼び戻しているときもそういう状態になっていました」

「過去に悟りを得た覚者と言われる人が、よくそのようなことを言っていますが、まさにそういう状態を経験されたということでしょうか？」

「はい、わたくしの感覚では、失踪というのは完全な自己喪失、肉体までも失った状態じゃないかと思うのです。原因は分かりませんが。その状態と同じような状態になって失踪者と一体化することが失踪者の帰還への鍵だと思います」

「大変意味深いお話で感服致しました。恐らくこの場にご出席の皆さん

も感服されたことと思います。ところで、今日は、特に学校の許可を得て実際に失踪された愛子さんにもいらっしゃって頂いています。では愛子さん、こちらにお願いします」

愛子がスタジオに姿を現した。紺のニットのワンピースを着て眼鏡を掛けている。穏やかなイメージだった。

「愛子さん、早速ですが、今お母さんがおっしゃっていたことについて、どう思われますか？」

「わたしも、母の言う通りじゃないかと感じています。わたしは失踪した時の場所には戻りませんでした。自分が戻って来たとき、身体というか、周り全体がとっても暖かくて何か柔らかい真綿に包まれて運ばれたような感覚を持っていました。とても嬉しかったのを覚えています。それが愛かどうかは分かりませんが」

「あなたはお父さんのことも愛しているとおっしゃっていますね」

「はい、わたしを誕生させ育ててくださった方です。でも、そういう理由は関係ありませんでした。ただわたしは家が大好きですし、そこにいる父と母も大好きだったというだけです」

「先日、お父さんとお母さんは離婚されましたが、それについてはどう思いますか？」

「それは、父と母が選んだ道ですのでわたしは何とも思いません。今は母の元で幸せに生活しています」

「お父さんが居なくて寂しくありませんか？」

「母とふたりになったばかりの時は寂しかったですが、今は何ともありません」

「麻子さんに伺いますが、あなたは一人娘の愛子さんを失ってしまって絶望の中にいらっしゃったと思いますが、どのようにして先ほどおっしゃったような愛の境地に至ることができたのでしょうか？差し支え無ければご説明頂けますか？」

「はい、確かにわたくしは絶望の中に居ました。その時、家にひとりの方が訪ねて来てくださって、その方に導かれてあのような体験をすることができたのです」

「その方は、どのような方ですか？個人的なことでするので、差しつかえのない範囲でお答え頂ければと思います」

「申し訳ありません。その方のことは申し上げられません。ただ、わたしはたった今、無条件でその人の為に死ぬことができます」

「分かりました。もうこれ以上はその方について質問致しません」
それから、暫くの間解説者の説明が続いてからニュース特番は終わった。賢はテレビを切った。

亜希子が賢に抱きついて言った。

「あなたのことでしょう。わたくしには分かります。今あなたと一緒に体験したことを麻子さんも体験なさったのね」

「*****」

「あなた、今夜はわたくしを抱いて寝てください。わたしはあなたから離れたくありません」

「*****」

賢はスマホを充電器にセットしてから灯りを消した。ふたりはタオルを取り去ってパジャマを身に着け一緒に毛布の中に潜り込んだ。ベッドに入ると亜希子は直ぐに賢に身を寄せた。

「一晩中このままで、亜希子、眠れるか？」

「わたくしはあなたがこうして抱きしめていてくださればそれだけでいいの。あなたに抱かれているだけで天国にいるような気分よ・・・今、あなたの為に死ぬるかしら・・・そんなこと、考えたこともないわ。ただあなたと一緒にいるだけで、それ以外のことは、生きることも、死ぬことも、意識に登らないの。あなたはどうかしら？」

「おれも、こうしていると全てが消えてしまって、生も死もなく、他のものは何も存在していない」

「あなた、強く抱いていて」

.....

二人がホテルを出たのは午前9時頃だった。雪は止んでいて、次第に強くなって来そうな日差しが昨夜積もった雪をぎらつかせている。空気はひんやりしていて、時々路上を吹き抜ける風が肌を凍り付かせるようだ

った。道路に積もった雪はそのまま残っていたが、昨夜ふたりが付けた足跡は沢山の新しい足跡に掻き消されていて、判別できなくなっていた。汚れた雪が路肩に掃き寄せられている。道路の中央部分は人が通れるようになっていた。ふたりはその部分を歩いた。雪解けの氷水溜まりに靴が滑り込まないように注意して歩いた。亜希子は賢に手を引かれ雲の上を歩いているような感覚だった。まだ、今朝まで賢の腕の中に居た余韻が身体を巡っている。時々賢の顔を見つめては頬を赤くしていた。賢は眼を覚ますと、まだ腕の中に居る亜希子を抱き締めた。亜希子は自分が賢の腕の中にいることを意識して心臓が早鐘のように打つを感じていた。ふたりはシャワーを浴び、着替えてからそのままホテルを出て来た。食事はスキップした。呼び鈴を押すと、早苗が直ぐに玄関に顔を出した。

「おはようございます。今日もよろしくお願ひ致します。昨日は雪で大変だったでしょう？」

「おはようございます。結構降りましたね。何とかホテルに辿り着きました」

「おはようございます。今日も附いて来ました。よろしくお願ひ致します」

「心の整理が進んだ為でしょうか、今日は全てが美しく見えます。さあ、どうぞお上がりになってください」

居間に上がると、昨日とはどことなく違った雰囲気を感じられる。ふたりはこの部屋が意外に明るいのに驚いた。賢と亜希子はコートを脱ぐと、早速仏壇に線香を上げ瞑目してから昨日と同じ席に着いた。賢は瞑目しても意識に義母のイメージが浮かび上がって来なかったことにほっとした。早苗が茶を入れて来て賢の左隣に座った。

「昨日は子供達のことを思い出して、遅くまで眠れませんでした。もう一度娘達に会って話をしたいと思います。何とか娘達を呼び戻せないかしら？」

「それは止めた方がいいと思います。意識の繋がりを付けることは出来るかも知れませんが、そんなことをすると娘さん達の為になりません。

衝撃を受けて強制的に実在世界に帰還させられた魂は、安定するまでに時間が掛かります。今は娘さん達の平安を祈って、そっとしておいてあげた方がいいと思います。将来は肉体を持って生き返らせることも可能になるでしょうが、肉体を作るプロセスはとても複雑だから、今の技術 — というより、人間の意識レベル — では再現できないと思います。既に亡くなった人を呼び出す行為、それは執着そのものを意味することなので好ましくないと思います」

「わたくしも、去年の事件の後、何度恐山に行って娘達と話をしようと思ったか知れませんが、でも娘達に会ったら何て言っていていいか分からなくて、それに怖さも手伝って結局行かずにしまいました」

「それで良かったと思います。事件のことは早く忘れ、心を安定させた方がいいと思います」

「昨夜はずっと泣いていましたので、その所為もあるのか今朝はすっかりしています。もう、憎しみや恨み、嫉妬、慚愧の念、自虐的な感情などはほとんど無くなりました。今は、自分が体験したことがどれほど貴重なことだったのかと思うようにしています。義母や京都の母や竹下さんに対する感謝の念、子供達に対する愛おしさがわたしの小さな胸を一杯にしています」

「それは良かった。そういう心の状態にあれば、竹下さんの帰還も叶うかも知れませんが、一寸答えにくいかも知れませんが、あなたの心には竹下さんに対する愛情がどれほどありますか？」

「以前付き合っていた頃のような感情を抱いています。優しく、わたしを包み込んでくれるような。以前は何となく頼りなく感じましたが、あの突然車の中に現れて消えてしまった頃には、とても頼れる存在になっていました。どうしてこの人と結婚しなかったのかと悔やんだりもしました。昨日の賢さんのお話のおかげで、主人と結婚して二人の子供をもうけ、その子供も失ってしまって、再び竹下さんの方を向き始めた自分の人生はそれなりに意味のあるものじゃないかと思えるようになりました」

「僕が考える「失踪した方を帰還させる方法」は、全ての執着している

ものを捨てて自分を空しくし、唯愛の念に満たされた状態 — すなわち愛そのものになり切って、失踪した人との一体感を強めて呼び戻すことだと思えます。いまの早苗さんがどの程度自分を空しくできるか、悲しさや空虚さではなく我を忘れた状態になり切れるかということと、竹下さんに対する愛情の深さがどの程度かということに懸かっていると思えます」

「わたくしにはまだ自信がありません。自分では感じない心の何処かに子供達への想いがあるだろうと思えますし、竹下さんに対しては申し訳ないという感情が強くて深い愛情にまで至らないんじゃないか不安です」

「確かにそういう引っ掛かりを持った状態での瞑想では、なかなか目的を達成できないと思えます。でも試してみたい方法があります。早苗さん、便箋があれば持って来てくださいますか？無ければ昨日の手帳でも結構です」

早苗は立ち上がり、仏壇の下の扉を開けてそこから紙箱を取り出し、1冊の薄紫色の表紙の便箋を取り出すとペンを添えて持って来た。亜希子は何を考えているのかと覗き込むようにして賢の顔を見つめている。

「早苗さん、この便箋に竹下さんに宛てた手紙を書いてください。心からの思いを綴ってください。わたしたちがいることは忘れて心の奥の奥にあるものまで書き出してください」

早苗は頷くと、ペンを手にして便箋の表紙を捲った。絹目の便箋だった。早苗は暫くの間静かに目を閉じてじっと動かなかった。賢と亜希子も炬燵に入った姿勢を変えずにじっとしていた。賢も瞑目し意識を空しくしてみた。早苗の想念が動いているのを感じた。早苗の周囲を赤とオレンジ、黄色の混じった色の空間が取り巻いているように感じた。先ほどから賢の顔を見つめていた亜希子も賢の瞑目する姿を見て目を瞑った。亜希子は賢と過ごした時間に心が満たされていった。幸福感が全身を満たしてきた。暖かい雲に包まれているような感覚の中に自分を解き放した。至福の感情が湧き上がって、目頭に涙が浮かんでくるのを覚えた。それは嘗て経験したこともないような心地よい感覚だった。賢は瞑想の中に

いくつかの人影を見た。それが誰だか分からなかったが、早苗に近づいては遠ざかっていった。やがて人影は消え、早苗の周りにピンク色の雲が懸かった。その雲は暫く漂うように早苗の周りを巡っていたが、次第に薄い色になってきた。早苗が言葉を発した。

「あのう・・・一応書きましたが・・・こんな感じでよろしいでしょうか？」

「拝見してもよろしいですか？」

「はい、わたくしは内観さんには心の中まで全てをお見せします。何も隠すことはありません。一寸恥ずかしいですけどね」

賢は早苗に向かって会釈してから渡された便箋の文章を読み始めた。手紙の文は罫線の間小さな字で綴られている。3枚に渡って書かれていた。

「拝啓 竹下様

暫くお目に掛かっておりませんが、如何お過ごしでしょうか？わたしは義母と二人の娘を失い、あなたが失踪されてしまった事件の後、暫く絶望と諦念で虚脱状態が続いていました。京都から母が来てくれて、わたしの面倒を看てくれましたが、心の傷は深すぎて癒えることがありませんでした。主人は自責の念からか、あれ以来益々わたしから遠ざかってしまいました。わたしはその時受けた心の傷を見ては嘆き悲しんでいましたが、やがて、わたしの精神状態が少し安定してきたのを見て、母は一時京都に戻りました。その後暫くして、内観賢さんにご友人の藤代亜希子さんというとてもご親切なお二人の方がわたしの元を訪れてくださり、心のあり方を教えてくださいました。おかげで、今わたしは自分の人生を否定するような気持ちを拭い去ることができました。内観さんのご指導に従って、こうしてあなたに手紙を認めております。わたしはあなたから離れ、主人との道を選びました。愚かなことですが、その頃のわたしにはあなたの優しさが物足りなかったのです。心の何処かでもっと格好が良く、スポーツマンのような印象を与える人との交際を求めています。それが生きることだと思い込んでいました。表面的なことに逡巡した自分を恥ずかしく思います。あの頃はあなたの優しさ、深い

愛情に気付きませんでした。わたしは自分の方向からしか世界を覗いていませんでした。如何にしたら自分が満足できるか、如何にしたら楽しい生活が送れるかということにしか視点が向いていませんでした。そんなわたしの姿を見て、あなたがわたしの前から消えました。正直に申し上げて、わたしはホッとしたのを覚えています。何と情けないわたしだったことでしょう。結婚したばかりの頃、主人は良き父親でした。よく二人の娘を遊園地や海水浴などに連れて行ってくれました。でも、主人は単身赴任で大阪に出張してから、次第にわたしのことを忘れてしまったようです。わたしばかりではありません。家族のことも顧みなくなってしまうました。心を奪われた女性が現れたからでしょうか。詳しいことは分かりませんが、ほとんどわたしたちへの通信が無くなりました。そんな折、突然わたしの前にあの無頼漢の暴力団の男が現れたのです。あの男はわたしを脅迫しました。主人が付き合っていた女性との間に子供が出来てしまったと言うのです。本当のことは分かりません。しかし暴力団の男が要求するお金はわたしたち家族が用意できる様な金額ではありませんでした。主人の給与振り込みでやっと生活しているような状態でしたから、とても応じることはできませんでした。暴力団の男は強引にわたしの^{からだ}肉体を要求してきました。わたしはパニックに陥りましたが、なす術もなく応じてしまいました。本当は毅然と立ち向かうべきだったのです。しかし、それができませんでした。暴力団の男はその後も毎月のようにわたしを呼び出しました。しかし、それによって要求している賠償金の額を減らしてくれる様子もありませんでした。そんな折、あなたから連絡を頂いたのです。わたしは苦しみから逃れられるかも知れないという希望と共に、あなたに済まないという気持ちを強く抱きました。あなたは、過去のわたしの酷い仕打ちにも拘わらず、わたしやわたしの家族のことを心配して、いろいろ相談に乗ってくださいました。わたしはあなたからの労りの言葉と励ましから、やっとの事で勇気を出して、暴力団の男を拒否する決心を固めることができたのです。わたしのように気の小さな女にとっては一大決心でした。わたしは暴力団の男に弄ばれていることが、安全地帯だと勘違いしていました。そんな過ちに気付

かせてくださったのがあなたです。丁度その時義母も暴力団の男の脅迫を知って、警察に訴えると言ってしまったのです。その結果、あんな悲惨な結末になってしまいました。わたしに初めから勇気と見識があったら、この事件は防ぐことができたと思います。大きな教訓を学びました。その代償はあまりに大き過ぎてわたしにはとても背負い切れないほどです。わたしは家族という最も大切なものを失ってしまいました。いつもわたしのことを意識してくださるあなたが、あそこに現われてくださったおかげで、わたし自身は殺されずに済みました。あなたの意志がわたしを守ってくださったのだと思います。突然車の中に現われたあなたの姿を見てわたしは驚愕しました。それは不可思議な現象への恐怖心だったと思います。わたしだけでなく、あの暴力団の男も驚愕したので、わたしは救われました。あの男は本当は気の小さな男だったのです。あなたから盗んだ車の中にあなたが現れたのだから当然かもしれませんが、わたしが車から逃げ出すと、一目散に逃走しました。そして、わたしの大切な人たち3人の命を奪った後、その車も乗り捨てて逃亡したようです。あなたはあなたの車の中にご自分のコートを残されていました。そのことで、事件の解決が難しくなりました。わたしは警察にありのままを話しましたが、信じてもらえませんでした。わたしの気が動転している為と、あの男への恨みによる嘘の証言と思われたのです。一方、時間的な矛盾点に翻弄されながらも、警察はあなたを殺人犯として疑っていたのです。しかし、別件であの暴力団の男が逮捕されて全貌が明らかになりました。静かにあなたの心を見つめると、感謝の気持ちと、嘗てあなたと寄り添ってお話ししていた頃の思い出が沸き上がって来ます。あなたは乗り心地のよいボートのようなようでした。わたしを乗せて荒波を超えていてくださったのです。それなのにその荒波に気づかず、穏やかな心地よさに満足しなかったことをいま悔やんでいます。これがわたしです。わたしはその程度の女です。でも、あなたはそんなわたしを守ってくださいます。わたしの近くに戻って来てください。あなたが傍にいてくださったなら、わたしには怖いものは何もありません。あなたが戻っていらしたら、わたしは離婚します。身勝手かも知れませんが、もしあな

たがこんなわたしを受け入れてくださるのなら、今後の人生をあなたに寄り添って生きてゆきたいと思っています。わたくしの許に戻って来てください。わたくしの傍に帰って来てください。

XX月XX日

大河原早苗より

かしこ」

賢は便箋の文章を読み終えると、早苗の心が竹下の方向に真っ直ぐに向き始めていると感じた。しかし、手紙の中に子供達の話が出てこないことが少し気に掛かった。

「今日、これから少し竹下さんの帰還に挑戦してみましよう。意識を集中させて瞑想状態に入ってゆきます。僕たちが見守っていますから、あなたの意識が不安定な状態になったり、精神の錯乱状態に陥る危険性を感じたら直ちに中止させます。早苗さん、今不安はありませんか？」

「ええ、全くありません。今手紙を書いたので朝より一層気持ちの整理ができてきました」

「そう、それは良かった。それでは、竹下さんを思い浮かべる切っ掛けになるものが何かありますか？写真とか、手紙とか」

「写真はありますが、手紙は隠し持っています。失踪される少し前のものですけど。以前付き合っていた頃のものには結婚の直前に全て焼却してしまいましたので」

早苗は立ち上がって再び仏壇の下に行き、引き出しから1通の封書を持って来た。差出人名は書いてなかったが、賢にはそれが竹下から早苗に宛てた手紙だということが直ぐ分かった。早苗は中から2枚の便箋を取り出した。1枚は白紙だった。早苗はそれを賢に渡して読むように促した。

「拝啓 早苗さん

大分ご無沙汰しています。お元気ですか？僕はずっと独身生活を続けています。あなたが急に僕から遠ざかって行ってしまったので、初めは随分苦しみました。どうしてあなたの気が変わったのか分かりませんでした。しかし、あなたがそう望んでいることを知って、僕は断腸の思いで身を引きました。

ご主人が大阪に見えた頃、僕は昔の友人としてよく一緒に酒場に行って世間話をしました。ご主人はあなたや娘さん達の話をおぼろげに話していましたが、僕はあなたの話を聞くのが好きでした。あなたが幸せならそれでいいと思って我慢しました。しかし、最近ご主人の様子が少し変わってきたので、僕はしばしば注意をしていました。ご主人が他の女性と付き合い始めたのを知ったからです。やがてご主人とその女性の間には暴力団の男が介在していることを知りました。僕はご主人に早くその女性と手を切るように忠告し続けたのですが、それも聞き入れてもらえませんでした。そんな折、相手の女性が強盗傷害事件の被害者になりました。その女性は男性関係がだらしなくて、その相手の一人に刺されたようです。この女性に関係していたのがその暴力団の男です。この男は酷い男で、あちこちの人を恐喝して金を脅し取り、生活しているような男です。その男がご主人と接触しているのを知りましたので、心配になってこうしてあなたに手紙を差し上げた次第です。もしや、この男があなたを恐喝しているようなことはないかと思ったのです。何事もなければ結構ですが、もし、恐喝を受けているようでしたら、すぐに返事をください。僕があなたの元に伺って、あなたを守ります。それではお身体を大切にしてください。

竹下より

敬具

「わたくし、竹下さんにすぐに返事をしました。すぐに会いたいです。でも、その時は既に暴力団の男と関係をもってしまってから10ヶ月が経過していました。是非あの方に会って、救ってもらいたいと願いました。あの方はわたくしの手紙を受け取ると、その日の内に大阪を発って青森までいらっしゃってくださいました。あの方はわたしを慰め、労り、そして励ましてくださいました。とても優しい方です。でも、わたくしは暴力団の男との関係についてはどうしても話せませんでした。あまりにも恥ずかしくて。あの方はわたくしの為に涙を流してくださいました。もっと早く連絡すべきだったとおっしゃって、ご自分を責めておいででした」

早苗は涙ぐんで話した。賢は亜希子の方を見ながら「竹下さんの帰還へ

の挑戦を始めよう」と言った。それから早苗にその手紙を開いて、何度も読み返すように促した。早苗は素直に賢の指示に従った。賢は亜希子に早苗の身体の動きを注視するように頼んだ。身体が異常に揺れ始めたり、震え始めたら賢に知らせるようにと言った。賢は自分も早苗と一緒に瞑想状態に入るから見ていて欲しいと言った。亜希子はやっと自分も役に立てる場面になって嬉しそうだった。賢は早苗を促して思考を止めさせた。それが難しいことは分かっていたが、暫くして早苗が頷いたのでどうにか思考が止まったらしいと判断し、今度は意識を竹下に集中させるように促した。その後で賢は早苗に対し、改めて自分の言葉に従うように言った。早苗は黙って頷いた。

「竹下さんに意識を集中してください。遠くに光が見えてきたらその光に集中してください」

賢は自分も半眼で瞑目した。空間に幾つかの小さな光が動いているのが分かった。突然、一つの光が近付いて来た。だんだん大きくなって来る。その後から2つの光が近付いて来ている。小さかった2つの光が次第に大きくなり、初めに大きくなった光が遠ざかって行った。また、2つの光が遠ざかり、一つの光が近づいて来た。それを何度か繰り返している。その時亜希子の声がした。

「あなた、早苗さんの身体が揺れています」

賢は目を開いた、早苗はガクッと首を垂れて身体を前後させている。賢は二つの光が二人の娘の意識だと思った。これ以上続けるのは危険だと判断した。

「早苗さん、さあ、光から意識を外して目を開けてください」

早苗は半眼のように目を開けたが、意識が定まらずに身体を前後に動かし続けている。

「早苗さん、今から3つ数えますから、合図と共に目を開けてください」
賢がやや強い口調で「1、2、3、はい」と言った。早苗はまだぼーとしていたが、身体の動きは止まった。賢は早苗の意識に二人の娘が繋がっていると思った。二人の娘の意識が死後のプロセスの途中段階に浮遊していることを知った。賢は早苗の手を強く握った。

「さあ、今度はあなたの意識を僕に向けてください。1、2、3、はい」
早苗は目を見開き、頭を左右に振った。

「わたくし、初め竹下さんのことを思おうとして、一所懸命努力しました。そしたら、何かがわたしに向かって来て、混乱して照準が合わなくなっていました」

「ええ、そのようです。あなたの意識の底にまだどなたかに対する強い思いが潜んでいるようです。もしかすると二人の娘さんかもしれません。娘さん達も何かに対して執着していて、まだ死後の意識が定まっていないのかもしれません。もしそうなら、まず、娘さん達の意識を本来の方向に向けることをしなくてはならないと思います」

「どうしたらいいのでしょうか？」

「そう、退行催眠をやってみましょう。あなたの意識を過去に遡らせて、原因を探してみようと思います。いいですか早苗さん、蠟燭と受け皿があったら貸して頂けますか？」

早苗は再び仏壇の引き出しから10センチほどの1本の蠟燭とマッチを持って来た。それから台所に行き1枚の小皿を持って来て、蠟燭に火を付け蠟を垂らして小皿の上に蠟燭を立てた。火がゆらゆらと燃え上がった。賢はカーテンを引き、部屋を外の光から切り離れた。早苗は自分の席に腰を下ろして、賢の方を見つめた。部屋はやや薄暗くなったが、やがてその薄暗さにも慣れて来た。賢は早苗の方に身体を向けて話し掛けた。

「さあ、この蠟燭の火をじっと見つめて、意識をこの火に集中してください。そう、じっと見つめてください。今、あなたは蠟燭の火になって自由に動き廻ることができます。あなたは次第に過去に遡って行きます。今あなたは京都のお母さんと別れました・・・更に時間を遡ります・・・いま、京都のお母さんがやってきました。あなたに会っています。更に遡ります。あなたは事件のことを知らされました。その衝撃が全身を走ります」

そこまで話すと、早苗の顔色が真っ青になって、身体が震えて来た。賢は続けた。

「大勢の人たちが家にやって来ています。あなたは、どうしていいかわかりません。娘さん達のことを思ってください。娘さん達が殺されてしまったことを思い出してください」

突然早苗が声を出して泣き出した。早苗は激しく泣き崩れた。その激しさに亜希子は戦き、悲しみが込み上げてきて涙を流した。

「ゆかり！ひとみ！ごめんなさい、わたしが悪かったのよ。お母さんを許して！お母さんがもっとしっかりしていれば、こんなことにはならなかったのに。お母さんを許して、うううっ。お義母さん！わたしを許してください。うううっ」

早苗は10分ほど泣き続けた。泣き声が収まってきたのを確認して賢は言った。

「あなたは今、竹下さんからの手紙を見えています。あなたの心には竹下さんと過ごした頃のことを思い出されます」

早苗の目に涙が浮かんできた。顔は晴れて、安堵感に溢れているようだった。

「さあ、ずっと時間を遡ります。あなたは暴力団の男から連絡を受け、恐怖におのきなながらも仕方なく会っています」

早苗の顔に恐怖と嫌悪感が表れて、額に縦皺が出来てきた。暫くすると、早苗の額から皺が消えて、身体をくねらせるようにして喘ぎ始めた。

「ああ、どうしよう。ああ、どうしたらいいの。ああ」

やがて、喘ぎが止まると、疲れたようにぐったりとし、顔に疲労感が顕れ、再び憎悪の表情に変わった。

「さあ、もっと時間を遡ります。今あなたはご主人と娘さん達と一緒に海に来ています。さあ、娘さん達と遊んでいるあなたを思い出してください」

早苗の顔に喜びの感情が溢れてきた。賢は早苗の退行睡眠を早苗が生まれる処まで進めた。早苗はどこに記憶されているのかと思うほど、あらゆる出来事を蘇らせていって、喜びや悲しみを身体全体で表現した。賢は特に早苗の潜在意識に潜んでいるものを引き出すように努めた。誕生直後にまで至った後もう一度現在に戻してから、賢は早苗を退行睡眠か

ら醒めさせた。

「それでは、わたしが3つ数えます。数え終わった時「はい」と言いますので、その合図で目を覚ましてください。あなたは今、過去の世界から現実の世界に戻ります。1、2、3、はい」

早苗はやおら目を開いた。早苗の潜在意識に押し込められていたふたりの娘を失った悲しみの感情が怒濤のごとく表層意識に吹き出してきて、涙と共に解放された。賢は早苗に向かって言った。

「早苗さん、娘さん達を心の中で抱き締めて深く詫びてください。そして、愛情を注いでください。共に生きることができたことを感謝してください。娘さん達が向こうの世界に渡るのを心静かに見送ってやってください。娘さん達はいつもあなたと共にいます。本当は生前も死後も無いのです。この世界は永遠不変の世界なのです。皆ここでの経験を通して、また元の世界に戻ります。そう、ここで祈るのが難しければ、仏壇に向かって祈って頂いても結構です」

早苗は賢に向かって頷いてから立ち上がって、仏壇の前に行き線香を焚いて祈った。暫く祈っていたが、おもむろに元居た炬燵の席に戻って来た。

「内観さん、あなたは本当に凄いな。わたくしは自分が何故生きているのか、何となく分かってきたような気がするわ。娘達のことでもう心が揺れることはないような気がします。とても安らかな心地がします」
亜希子も嬉しそうに頷いた。賢は言った。

「大分疲れたでしょう。気分の転換を図った方がいいでしょう。少し外に出てみませんか？」

二人の女性は頷いた。特に亜希子は嬉しそうだった。早苗が蠟燭の火を吹き消してから言った。

「どこかごらんになりたいところはありますか？わたくしがお案内いたします」

「民族資料館のようなところはありませんか？ここの地域は日本でも最も古い民族の住んでいた地域と謂われていますね」

「はい、いろいろな遺跡があります。この津軽地域には千古の歴史があ

るとのことです。縄文初期、いいえそれよりもっと前の話も残っています。でも、そのことは日本書紀にほんの少し出てくるだけですので、あまり知られていません。ですから、この地域の人達は遺跡の保存や、歴史的な価値の確立に躍起になっています。一寸行き過ぎのきらいもあります。亀が岡遺跡などはあの有名な遮光器土偶が出土してから国でそれを取上げてしまって、実際の遺跡を訪ねても、実物の土偶を見ることができないのです。実物は上野の博物館にあるようです。一寸馬鹿げています。深浦とか五所川原とか資料館はありますけど、今からですと今日中に帰って来られるかどうか分かりません。近い所では東北本線沿いの野辺地にも民族資料館があります。縄文時代の初めの頃の遺跡からの出土品が展示してあるようです。ここからは特急で行けば30分足らずで行けます。でも、折角青森にいらっしゃるのですからなんと言っても三内丸山遺跡に行かれるのが一番と思います。青森駅から1時間に1本バスが出ていますから。ご存じですか、この青森は北の外れと言われて馬鹿にされていますが、縄文時代には大都市があったようなのですよ。世界にあるエジプトやメソポタミアの様な遺跡なんです。文献の裏付けも、大建造物の遺跡も残されて無いので、あまり重視されてこなかったのですが、建築会社が六本柱建物跡を復元したりして、世界に認知させようと躍起になっているようです。でも、少しやり過ぎて、遺跡のような感じがしなくなってしまったように思います。わたくしも何度か行きましたが、外部の雰囲気はまるで公園といった感じです。数え切れないほどの出土品があって、それを見るのはとても楽しいんですよ。4、5千年も前に1500年間も続いた文明ですからね。青森県人はこの話をする時は胸を張るのよ。京都や奈良の都よりずっとずっと昔なのよ」

居間の柱時計は12時15分を差していた。3人は直ぐに出掛けた。陽が照りつけて、降り積もった雪の表面が溶け出して凍り付き、ぎらぎらと反射する光にまぶしさを感じる。一旦青森駅まで戻り、そこからバスに乗ることにした。三人は駅のスナックで簡単に食事を済ませた。バスには早苗が一人で座り、その後ろの席に亜希子と賢が並んで座った。亜希子が賢の方を向いて言った。

「わたくし、一度縄文時代の土器を見学したことがあるのですが、土器の縁にいろいろな立体模様が施されていて、それが邪魔になって実用にならないような気がしたのを覚えています。縄文時代の人たちはどうしてあんな土器を作ったのかしら？」

「それ、火炎土器のことかしら？ここの遺跡からも沢山出土しているのよ。実用の土器も別にあっただようですよ」

「そう、ああいう土器は、生活に使うものとして作ったんじゃないと思うよ。今の人はものを見ると、すぐにそのものに名前を付けて用途を説明しようとするけど、そういう観点から縄文土器のような作品を見ることは難しいと思うよ。現代人の創作力ではまず作れないだろうな。炎を造形しているような模様だけど、芸術的に見ても非常に優れているらしいね。縄文時代の人たちの精神性は今のわれわれよりずっと高かったって云われているよ」

「そうなんですか。わたくしも、あの土器を見ていたとき、模様は複雑なのに、何となく心が落ち着いてくるような感覚がしてきたのを憶えています」

やがてバスは終着点に着いた。ふたりは早苗に導かれて縄文時遊館というパビリオンから入った。そこからは外套の様な黄色いユニホームに身を包んだボランティアの案内係の男性がガイドをしてくれることになった。遺跡は非常に広大で、冬に廻るのは厳しいとのことだったが、取り敢えずガイドの案内に従って廻ることとした。雪で白一色の平地にぼつりぼつりと建物が建っていた。少し行くと巨大な6本の組柱が立てられていた。一面の雪の中に立っている柱組みは、異様な感じを与える。当時は海岸に近かったのだとガイドが言った。「海洋に出る舟を見張ったり、信号を送ったりする遠見櫓だったのかも知れない。いや、あるいは北海道や大陸を望んだのかも知れない」などと賢はあれこれ想像してみた。出掛けに早苗が貸してくれたマフラーが有り難かった。亜希子は賢の腕にしっかりしがみ付いて歩いた。人の通る道は除雪した跡があるものの、雪はその上にかなり積もっている。早苗は賢が歩きにくそうに、よろけながら進んでいる姿を見て笑った。早苗の笑い声に、亜希子は少

し恥ずかしくなって賢の手を放そうとしたが、雪に埋もれてしまいそうで、またしがみ付いた。三人は復元された竪穴式の建物を見学してから資料館に入った。

「あなた、暖かい時にもう一度連れてきてくださらないかしら。だって、縄文時代って今より2、3度暖かかったんでしょう。ここもきっと雪はあまり降らなかったはずよ。温かいときの方が、実際の縄文時代を感じ易いように思うわ」

「そうだな。だけど、雪の中の縄文遺跡もなかなかじゃないか。人の手の加えられた形跡も消えて、白一色だ・・・亜希子、寒くないか？」

「大丈夫よ。でも歩き難くて・・・あなたが頼りよ」

長い間北国に生活している早苗は流石だった。雪の中をうまく歩いた。資料館に入ったふたりは、ホッとして溜息を吐いた。国や県は最近まで発掘された資料の整理を続けてきたが、漸く一区切りを付けることができたので資料館は新築され、陳列には縄文時代の生活を堪能できるような工夫がなされていた。発掘されたものから嘗ての縄文時代に対する認識を覆すような新たな概念が推定された。縄文人はこれまで考えられていたように、動物を追い、山の中の木の実を拾って食料を確保するような生活をしていて、農耕文明人の弥生人に滅ぼされたような人びとではなく、いろいろな技術を持っていて、広く南方、北方との交易も行っていた人々だったようだ。ここに展示されている品々が、それを物語っていた。ゴミ捨て場だったところから発掘される物は廃棄処理された物。そこから土偶や陶器の破片が、これでもかというほど何層にも渡って発掘されたとガイドが説明していた。1500年間という時間は、想像出来る限度を超えている。聖徳太子の頃から現在までの時間と同じだけの時間を生き抜いていたのだ。その間、同じような形態で生きていたと考えるとそれこそ驚異だった。賢は思った。「本当にそうなのか。時間の経過が現在の物差しで測れるのだろうか？もっとスローな生き方をしていたのではないのだろうか？今の10倍も遅いというような」 外側より内側を重視した生き方だったように思えた。現在の外側のみに捕らわれた、現象重視の生活ではなかったのではないかと思った。早苗が言っ

た。

「わたくしはここに来ると、何かとっても懐かしい気がするのです。以前ずっとここに居たような、そんな感じがするのです。今は球場にしようとした場所だけが遺跡の場所になっていますが、これはほんの一部で、ここは港町だったような気がします。居住区は別にあって、漁や交易の時だけ、ここに移動して来ていたような気がします。東日本大震災の後、東北の沿岸地域の住民はこぞって高台移転を進めましたが、縄文時代の人々は津波の恐ろしさも良く知っていて、居住区を高台に造っていたように思えるのです。あの6柱の櫓は行き交う舟の監視だけでなく、海の状態も観察出来る物見灯台だったのだと思います。他にもいくつかの町があって、人々はそれらの町を移動しながら生活し、定住することはなかったような感じがします」

ガイドが言った。

「ええ、おっしゃるような意見を言う学者の方もいらっしゃいます。まだ、縄文時代については我々の知らないことが山のようにあるのです。さっきごらんになったポシットや、火炎土器からすると、縄文人の心の豊かさが感じられませんか？」

亜希子が応えて言った。

「はい、わたくしもそう思います。この自然の多様性に接し、縄文人がいろいろなことを感じ、思い、行動していたことは、現在のわたくしたちがコンピュータのスクリーン上でいろいろ考え、データを作り、テレビやラジオからの情報に従って行動することより遙かに豊かな内容だったような気がします。木の葉の一枚にも凄いシステムが仕組みられていますから、いくら人間がコンピュータでデータ操作して何かを作り上げても、とても自然界の創造物には及ばないと思います。縄文人はその自然と共に生きていたのですから」

ガイドが言った。

「おっしゃられる通りです。縄文人は自然の中で生きていました。今のわたくしたちには無い豊かな生を生きていたのです。この土偶をご覧ください。これらは一体何だったと思いますか？」

早苗が言った。

「お守りじゃないですか？だって、ゴミ捨て場に廃棄されているということは、きっと、土偶に願を掛けて、それが達成された時必要無くなって廃棄したんじゃないかしら」

「僕は、これは人形だと思うよ。現在のように子供が遊ぶ人形ではなくて、自分を映す人形じゃなかったのかな。自分のプラス面、マイナス面を表現して、人それぞれそれを自分流に扱っていたんじゃないかな。病気になるるとそこに気を移して、それを廃棄したんじゃないかな。何かを達成しようとする、土偶を通して意識を集中したのじゃないかと思うけど、どうかな？だから妊婦を表現した土偶が多いと思うんだ」

賢が言うと、ガイドが

「なるほど、あなたの考えは分かりやすいですね。一番正解に近いかも知れませんね」

と言った。賢は亜希子の方を見て言った。

「原智明語録にも形と意識のことが書いてあったな。「形を持ってことを成就したらその形を壊せ」って。憶えているか？」

「いいえ、憶えていません。原智明語録は難しすぎてほとんど理解できませんもの」

三人は資料館を巡ってから、ガイドに礼を述べ、バスの時間に合わせて館を出た。少し風が出てきていた。少し強い風が当たると皮膚が凍り付くのではないかと思われるほどだった。賢は亜希子の手を引っ張るようにして歩いた。三人は急いで停留しているバスに乗り込んだ。バスには既に6、7人の若者が乗り込んでいた。仲間同士のようにであったが、皆無口だった。三人が乗り込むとバスは直ぐに走り出した。窓から見る三内丸山は雪の中に埋もれた唯の平地だった。暖かくなってから亜希子や祐子と一緒に来ようと賢は思った。三人は早苗の家に戻ることにした。早苗と一緒に夕食を摂って欲しいとふたりに言った。賢と亜希子は礼を言って快諾した。三人が早苗の家に着いたのは午後5時半過ぎだった。玄関の鍵を開けて早苗が先ず家に入り、灯りを点けて石油ストーブを点火した。賢と亜希子は早苗に促されて居間に上がった。早苗は先ず仏壇

に両手を合わせてから台所に立った。それから程なく3つの湯飲みと急須を載せた盆を持って来た。早苗が湯飲み茶を注ぎながら言った。

「お水って、本当に有り難いわね。寒い時は湧かせばすぐにお湯になって身体を温めてくれるし、暑い時は冷やせばすぐに熱を取り去ってくれるでしょう。本当に有り難いわ。特にこういう寒いときはしみじみそう思うわ」

「そうですね。水ってとても不思議な物質ですね。あらゆる物質の中で、個体が液体より軽い物質は水しかないんですよ。氷になると水に浮くでしょう。人間が氷河期も生き抜いて来られたのは、この性質のおかげですよ。それに雪になれば美しい結晶になるし、その結晶も一つ一つ別々の形をしている。蒸発すれば雲になって、恵みの雨を降らせてくれる。高いところから低いところに向かって流れるから、川が出来、生命の循環を作り出している。美と調和の形でね。お湯が沸く温度も氷になる温度も、人間の生活にぴったり合っているんですね。他の物質との調和性や反発性、つまり他の物質を溶かしたり分離してくれるから、水を通して生物は栄養を補給できるし、毛細管現象が働くから、我々の全身にはくまなく血液が循環できる。表面張力が働くから、細胞そして内臓器官がしっかり保たれる。しかも毛細管現象が最も強く働く温度は、地球上の動物の体温に合っているんですよ。だから、血液の循環がうまくゆく。水はあらゆる植物の中を巡って命をみなぎ漲らせる。それに水はわたしたちを清めてくれるでしょう。身も心も・・・数え上げたら限りがありません」

「本当に凄いですね。まさに奇跡ですね。神様の恵みですわね」

「そうです。もうこれは奇跡などというようなものではないんですよ。体液の塩分濃度は太古の海の塩分濃度と同じなんです。水はわたしたち自身なんです」

「あなた、水も自分たちの意識で作っているとおっしゃるのでしょうか？」
亜希子が空かさず言った。

「うん、本当はね。だけど、そんなことを考えなくても、水は働いてくれている」

早苗は賢の説明を目を丸くして聞いていたが、亜希子の「意識で水を作る」という言葉を聞いて頭が混乱してきた。そして、賢がそれを肯定したことに更に戸惑いを感じた。

「わたくしは夕食の支度をします」

「わたくしもお手伝い致します」

「いや一寸待って、まだそれほどお腹が空いていないだろう。水への感謝の気持ちも湧いてきて、少し意識レベルも安定してきているから、今瞑想するのが一番いいと思う。昨日と同じようにやってみよう」

「はい、分かりました。では竹下さんからの手紙を持って来ます」

早苗は立って仏壇の引き出しから封書を取り出し、仏壇に両手を合わせて一礼してからそれを持って来て自分の前の炬燵卓上に置いた。

「早苗さん、竹下さんと知り合ったばかりの頃のあなたに意識を戻してください。亜希子は昨日と同じように早苗さんを見張っていてくれよ」

亜希子が頷くと、賢は早苗に向かって語り掛けた。

「これから暫くの間心を落ち着けてください・・・心の中を空しくして、何も考えないでください。只、僕の話す言葉に従ってください」

早苗の顔は解放されたように穏やかである。賢は早苗に瞑想に入るように促した。早苗は半眼となり、次第に瞑想状態になっていった。賢が竹下を呼ぶように伝え、早苗の口元にほんの僅かな微笑みが浮かんだ。賢は早苗に竹下を呼び続け、その意識を切らずに次第に強くしてゆくように言った。そうしておいて、自分も瞑想状態に入った。賢は瞑目して、その状況を客観視した。早苗の意識に一つの光が浮かんだ。その光が次第に近付いて来て、その中に竹下の姿が現れた。早苗は強く呼び続けた。光が薄れ竹下の姿がはっきりしてきた。その姿が次第に大きくなり、恰も目の前に現前しているようになってきた。早苗は更に呼び続けた。突然早苗の意識に、稲妻に打たれたような衝撃が走った。早苗の身体が横に倒れた。亜希子は慌てて言った。

「早苗さん、だいじょうぶですか？ あなた、早苗さんが・・・」

賢にも竹下の姿が見えてきていたが、突然光が輝いたと思ったら、意識から消えた。そして、亜希子の声で目を開けると、横向きに倒れた早苗

の横に一人の男性が座っていた。やや項垂れているような姿勢で、ぼーっと中空を見つめている。賢は成功したと思った。亜希子は竹下の出現が瞬間に起こったことにそれほど大きな衝撃を感じなかった。写真のフラッシュを焚いたような衝撃的な出現ではなく、じわじわと空中から顕れた所為もあった。しかし、瞬時に顕れたことは確かだった。賢が声を掛けた。

「竹下さんですか？」

「・・・・・・・・ここは？」

「大河原早苗さんの家です。あなたを呼んでいたのです」

「僕は・・・・・・・・どうしてここにいるのでしょうか？・・・・・・・・確か会社を出て歩いていた時、急にふっと意識が無くなって・・・・・・・・そう、気が付いたら自分の車の中において、何かとても暑いんで、コートを脱いだら、いきなりガンと殴られたような衝撃を受けて・・・・・・・・ぼーっとしていたら、誰かが僕を呼んでいて・・・そして、ここに居る・・・・・・・・何がなんだか分かりません。そうだ、早苗さん・・・・・・・・早苗さんは大丈夫でしたか？」

亜希子は立ち上がって賢の後ろを廻り、早苗の背後に廻って肩に触れながら言った。

「早苗さん！早苗さん！大丈夫ですか？」

早苗はすぐに意識を取り戻した。竹下も早苗の存在に初めて気付いたようだった。ふたりは一瞬顔を見合わせ、直ぐにしっかりと抱き合った。早苗の目から大粒の涙が流れた。ふたりは暫く無言で抱き合っていた。

「早苗さん、大丈夫だったのですね？・・・・・・・・よかった・・・・・・・・でも、どうして自分がここに居るのか・・・・・・・・判らない・・・・・・・・あー、頭が・・・・・・・・痛い・・・・・・・・」

早苗は竹下の胸から顔を上げた。自分が竹下の腕の中にいることに初めて気付いた様だった。早苗は全身に鳥肌が立つような戦慄を憶えた。

「た、竹下さん！・・・・・・・・よかった！・・・・・・・・戻って来れたのですね・・・よかった」

早苗は再び涙を流した。竹下はまだぼーっとしている。賢が亜希子に向

かって言った。

「巫希子、竹下さんと早苗さんに水を持って来てくれないか？」

巫希子は「はい」と言うと直ぐに立ち上がり、台所から水を注いだグラスを2つ持って来て、一つを竹下に一つを早苗に渡した。竹下はそれをひと飲みにした。早苗も一口飲んで、グラスを卓の上に置いた。そして竹下からグラスを受け取ると、そのグラスを自分が置いたグラスの横に並べて置きながら、竹下を見つめるようにして言った。

「竹下さん、ありがとう。ずっと長い間、あなたの愛に気付かなかった馬鹿なわたしを許してください」

「早苗さん・・・待ってください・・・僕はどうしてここに来たのだろう。誰かに連れて来られたのかな？全然記憶がない・・・ああ・・・頭が」

「少し休んだ方がいいでしょう。竹下さん、あなたは失踪していたんですよ。直ぐには理解できないかも知れませんが、この世界とは違う別の場にいたのです。時間も空間も無い所に。だから、あなたの記憶に残っていること、会社を出て、車の中に頭れて、そしてここに頭れたことだけが、あなたのこの世界での事実です。その間の時間はあなたには無かったのです」

「今の話・・・よく分かりません。つまり、僕はあの会社を出た時からずっと、消えていたという訳ですか？」

「そうです。そして一旦盗難に遭ったあなたの車の中に現われて、またすぐに消え、そしてここに現われたのです」

「ということは、早苗さん、あなたは危険な目に遭わなかったのですか？僕はあなたのことが心配で、そのことで頭が一杯だったんです。それからどれくらい時間が経ったのでしょうか？」

「1年と一寸です。あなたが車の中に頭れてくださったおかげで、わたしは救われました。あの時、義母と二人の娘が犠牲になってしまったのです。わたしも危うく犠牲になる所だったかも知れません。あなたが頭れてくださったおかげで助かったのです」

賢が早苗に向かって静かに言った。

「早苗さん、気分は如何ですか？」

「もう大丈夫です。ご心配をお掛けして」

「それは良かった。もし、何か食べ物があったら、竹下さんに差し上げてください。お菓子や果物でも結構です。肉体をこの世界に定着させる為です」

早苗は立ち上がった。立ち上がる時少しよろけたが、亜希子が直ぐに支えた。早苗は台所から竹籠に入れた食パンとイチゴジャムの瓶、スプーンを持って来て竹下の方を向いて座り、食パンにジャムを塗ってそれを竹下に渡した。竹下は頷いてそれを受け取ると一口嚙った。確かめるように噛んで飲み込むと、一気に1枚を食べてしまった。

「とても美味しい。ありがとう、早苗さん」

「竹下さん、少し休んだ方がいいでしょう」

賢が諭すように言った。

「いいえ、大丈夫です。ここにこうして座っているだけで、段々落ち着いて来るのが分かります。それに早苗さんが無事だったのでほっとして・・・嬉しくて」

賢は竹下に炬燵に入るように促した。竹下は賢と向き合った位置に座った。

「僕は自分に何が起こったのかまだはっきり分かりません。それに、全身が痺れているようで、感覚がよく分かりません。本当はあまり寒さも感じないのです。人がずっと消えているなんてことが本当にあるのですね。それも服を着たまま。こんなことは初めてです」

「昔から神隠しというような現象があったようですが、それが狐に騙されたとか、天狗にさらわれたとかという逸話や民話に置き換えられて伝えられて来ているのはご存じでしょう。ところが、最近自分の意識で自分の身体を操作できる人が増えてきているようなのです。そういう人は、自分を瞬時に消したり、遠く離れた所に移動したりできるらしいのです。あなたも本当は今回が初めてではないんじゃないですか？これに似た経験はしていませんか？」

「僕は、ぼーっとして意識が無くなってしまうようなことは何度か経験

しています。その時は他の場所にいるような感覚がしているのですが、気が付くと元の場所に立っているのです。でも、それは誰にでもあることだと思っていました。よくぼーっとしていて、人に言われて初めて気が付く人がいるでしょう。あの人達も同じだと思っていたのです。ああいう時、僕は消えていたのかな？」

「そうとも限らないと思います。幽体離脱という現象もありますから。でも今回の失踪は消滅と遠隔移動の二つが同時に起きていますから、あなたの意識の作用があったと思うのです。あなたは早苗さんのことに意識を集中していたのではないですか？」

「はい、わたしはこの方から手紙の返事を頂いてから、もう気が気でなくなりました。それで何とか早苗さんのところに行きたいと、焦燥感に似た感情で胸が一杯になりました。会社を出て、歩いている内に急に意識が朦朧としてきて、このまま人混みの中を歩くのは危ないと思って、人気のない路地に入りました。それから後のことは全く覚えていません・・・ところで、失礼ですが、あなた方はどういう・・・」

「失礼しました。申し遅れましたがわたくしは内観賢と申します。そしてこちらは友人の藤代亜希子です。わたくしたちは同じ時期に起きた10件の失踪事件を調べています。実際わたくしと亜希子も自身の失踪体験を持っています。ですから、あなたのことが実体験として理解できるのです」

「そうでしたか。それでは少しでも参考になるように僕の周りで起こったことを覚えている限り詳しく説明してみます」

竹下は早苗に対する自分の心の動きと暴力団の男が出現してからの自分の意識の変化と対応について、賢と亜希子に詳しく説明した。その内容はこれまで早苗から聞いていた内容とほとんど同じだったが、竹下の早苗や早苗の家族に対する深い慈しみの心が賢や亜希子に強い印象を与えた。早苗は竹下の話を目に涙を浮かべてじっと聞いていた。竹下が話し終わると、早苗は食事の支度をすると行って台所に立った。亜希子もその早苗の後を追った。炬燵には賢と竹下がふたり残った。

「内観さん、あなたは人生を達観しているように拝見しますが、このよ

うな苦しい生をどんな風に生きておいでですか？よろしかったら、教えて頂けませんか？」

「ぼくは人生を達観などできていません。ただ、自分に起こることを全て喜んで受け入れているだけです。自分から進んで生きようとしていますから、一瞬一瞬が喜びに満ちています。唯それだけです」

「それでも、いろいろ苦しいこともあるでしょう。そういう時はどうするのですか？ぼくなにか、早苗さんを失った時は悲しくて、生きていても仕方ないと思って随分苦しみました。食べ物も喉を通りませんでした」

「ぼくはある人から、生きている時も死んでしまった後も何も変わらないって教えて頂いたんです。それと、全ては自分にとって最適な状態で頭れているということも教えて頂きました。それから全てを受け入れるようにしたのです。そうしたら、唯喜びがあるだけで、苦しみは無くなりました。病気も身体が何かを教えようとしているんだと受け止めています。そんな時は身体に応答するだけです。でも、もうほとんど病気には罹らなくなりましたが」

「失恋の経験はありませんか？」

「多分、僕は失恋はしないと思います。だって、相手と自分は同じだと思っていますから、自分の好きな人が誰か他の人と巡り逢って幸せを感じていたら、自分も幸せなんです。実際の恋心で強く相手を求めているとき、もし相手が拒否したら、悲しみに沈んでいる自分を外側から見るつもりです。多分、涙を流している自分を愛おしく感じると思います」

「でも、実際は辛いでしょう。わたしは辛かったです。今はこうして早苗さんの近くに居てあげられて、それだけで生きているという実感が沸き上がってきますけど」

「ぼくは最近になって、苦しんでいる自分を外側から見るできるようになったのです。あなたもそうした方がいいですよ。苦しみは実は喜びと同じなんだって分かります。だって、あなたの行ってきた行動は、僕があなたの立場だったらそうするであろう行動と同じです。だから、自分を外側から見たら苦しみは消えるはずですよ」

竹下は「うーむ」と唸って黙ってしまった。そして暫くして口を開いた。

「内観さん、さっき自分と相手とは同じだと仰いましたね。あれはどういう意味ですか？」

「少し理屈っぽくなりますが、自分という個は本来存在しないんじゃないかと思っているんです。自分が全体の中の一部で、そこから全体を見ているということにぼくたちは気付いていないと思うんです。ぼくは一旦、そのことが分かると、自分と他人との違いが無くなってくると感じています。ですから逆に相手のひとのことは全て自分のこととして受け止められると思うのです。もし、自分をその全体の中心に持ってゆくことができれば、自分が全体に反映するようになると思っています。日本の心はここにあるんだと思います。古からの日本の教えの中にこのことが記されているんです。禊、清めはこの中心に至る道だと思うんです。一旦その中心に至れば、自分の意志で周囲が変化するでしょう。そこから演繹的にすべてが生じ変化してゆきます。大宇宙の変遷も実は自分の中にその手懸かりがあるのだと思います。顕れているものや、自分の願望を追い駆けては駄目なんです。追い駆ければ追い駆けるほど、一層遠のいてゆきます。追い駆けるということは、達成されていないことを証明していますからね。恋愛中の恋人に対する心も同じだと思います。自らを鎮め、透明にしてその中心に至るよう可能な限りの努力をすることです。演繹の海を経て、帰納の核に至る。これが本来わたくしたちが生きることが許されている道だと思います。その道が至福への道だと思います」

竹下は目を丸くして、呆気にとられた。

「僕には、とても理解できそうにもありません。相手の中に自分を見て、自分の中に相手を見ることは何とかかなりそうな気もしますが……」

その時、亜希子が様子を伺いに戻って来た。亜希子は卓の上を整理し布巾で拭いながら言った。

「竹下さん、賢さんのお話、難しいでしょう。わたくしもいろいろ教えて頂きましたが、まだよく分かりません。でも、わたしはそれが正しいことだと信じています」

賢は亜希子を見て微笑んだ。台所から食事の支度が出来たという早苗の声が出た。早苗が大きなスープボールを持って来た。亜希子も急いで台所に戻り、全員の箸と茶碗、そして取り皿を持って来て卓に並べた。続いて早苗が酢豚とエビチリの大皿2枚を持って来た。最後に亜希子が茶の用意をして夕食の準備が出来上がった。竹下はまだぼーっとしているようで、時々袖口で目を擦っていた。それでも口元には作り笑いとも取れる微笑みを浮かべている。4人は談笑しながら食事を摂った。亜希子がいつもより饒舌になっていて、津軽の話を何度も早苗に聞いていた。早苗はそれに快く応えていたが、竹下があまり口をきかないのを気に掛けているようだった。食事が済むと4人は茶を飲みながらテレビのニュースを見た。竹下は自爆テロのニュースを見て目にうっすらと涙を浮かべて言った。

「まだ憎み合っているんだ」

1年前も連日自爆テロのニュースが伝えられていた。今1年の空白期間を経ても状況は変わっていなかった。折角預かった身体を犠牲にして、何故他の多くのひとの命を奪おうとするのか、竹下にはどうしても理解できなかった。竹下の言葉に一瞬全員が暗い顔になった。しかし、その後の6つ児の誕生のニュースがその暗さを拭ってくれた。少しして、賢は竹下に帰還後の警察や報道機関への対応について、予想されることを話した。何か支援が必要かと尋ねたが、竹下は「早苗さんとふたりで対応します」と答えた。これから通り抜けなければならない困難を予見しているかのように、ふたりはお互いの瞳を見つめて頷き合った。竹下は「自分達の力で解決します」と言った。賢と亜希子は暇乞いをした。翌日青森を発つことを伝えた。早苗と竹下は深々と頭を下げて礼を言った。そして万が一のことがあったらよろしく頼むと言った。竹下は自分も駅前のホテルに宿を予約すると言ったが、早苗が引き留めた。もう少し一緒に居て欲しいと言った。竹下は照れくさそうだったが、表情は明らかに嬉しさを内に秘めていた。賢と亜希子が早苗の家を出たのは午後8時半を回った頃だった。ふたりは三内丸山に出掛けた折に借りたマフラーを返そうとしたが、早苗は「外は寒いので、そのまま身に付けていらっ

しゃってください」と言って受け取らなかった。ふたりが玄関を出る時、早苗と竹下が外まで出て見送ってくれた。並んで見送っているふたりの姿は若い頃の恋人同士のように見えた。賢と亜希子は手を振りながら分かれた。雪は止んでいて、それほど深くもなかったが、亜希子はやはりぶら下がるように賢の手に縋り付いて歩いた。ふたりがホテルの部屋に戻ったのは午後9時10分頃だった。

部屋の暖かさがふたりを出迎えてくれた。賢が亜希子のコートを脱がせてクローゼットに掛け、自分もジャケットを脱いでそれをベッドに放り出すと、亜希子が賢の胸に飛び込んで来た。ホッとした気持ちがふたりを包み込んだ。ふたりは強く抱き合った。賢が腕の中の亜希子に風呂に先に入るように言ったが、亜希子は、賢から先に入ってほしいと言った。それが正しい順番だと言った。賢は少し微笑んだが、唯頷いて亜希子の意見に従った。ふたりは入浴を終えると、先ず亜希子の両親に電話をした。登紀子が電話口に出てこちらでの状況を聞いた。亜希子は全て順調だと答えた。登喜子は程なく藤代肇に代わった。亜希子は頷きながら暫く藤代の話聞いていたが答える様に言った。

「はいお父様、とても優しい方です。いま、ここにいらっしゃいます。いろいろなことを教えて頂きました。明日賢さんと一緒に家に戻ります。お父様もお変わりございませんか？」

亜希子は「お休みなさい」と言ってから、受話器を賢に渡した。

「お父様が、お話をしたいと申しております」

「もしもし、内観です。いろいろご心配をお掛けして申し訳ありません」

「内観さん、亜希子のことよろしく頼む。ところで、プロジェクトのことだが、こちらに戻ったら一度君をアシストするメンバーを紹介しておきたいと思うが、どうかね」

「はい、分かりました。明日は帰宅が夜になると思いますが・・・」

「いや、そんな急な話ではないよ。2、3日中にと思っているが、わたしがお膳立てしよう」

「ありがとうございます。よろしくお願い致します」

「それでは、亜希子のことをよろしく頼むよ」

「はい、ご安心ください。それでは失礼致します」

賢は電話を切った。続いてスマホを使って祐子に電話を掛けた。

「あなた、待っていたわ。どうだった？うまくいった？」

「祐子、竹下さんのことは上手くいったよ。彼は事件については関知していないけど、栗原が逮捕されているから、もうじき全面解決ということになるんじゃないかな。早苗さんの心の苦しきも解放されたようだよ。明日帰るからみやげを楽しみにしているよな」

「おみやげなんて要らないから、無事に帰って来て・・・今日ね、原智明研究会の所長さんのことで鹿児島島の橘さんから電話があったの。あなたのことを聴いていたわ。まだ手懸かりが掴めないんだって。今、警察が菅生さんのことを調べているらしいわ。所長さんが拉致されてからずっと連絡が取れないんだって。橘さん、あなたに聞きたいことがあるらしいわ。わたしにも聞いてきたけど、答えられなかった。わたしでは駄目みたいよ。それから・・・早瀬由美さんのこといろいろ調べたわ、帰ったら話すわね。風邪引かなかった？寒かったでしょ。早く会いたいわ」

「一人にしてごめん、俺は元気だよ。それより祐子は変わらないか？」

「わたしは、あなたがいなくて死にそうよ。ほんとうに寂しいもの」

「明日の夜には帰るから元気出せよ。で、橘さんの件は急いでいないのか？」

「そんな風じゃなかったわ。所長さん自身のことより、所長さんが説明してくれた原智明語録のことのようなの。意見を聞きたいって言っていたわ」

「そうか、それじゃあ、今日はもう遅いから、帰ってから連絡するよ。おやすみ」

賢はトラベルバッグから失踪事件調査ノートを取り出した。第3のケースのページを開いて書き込み始めた。亜希子がそれを横から覗いている。賢は竹下の説明の中に早苗を登場させた。省察の項目には「早苗さんは自分の気持ちを紙に書き出すことと、退行催眠で心の引っ掛かりを排除することによって竹下さんと呼び戻すことに成功した。この失踪事件は

早苗さんの義母、二人の娘さんの殺人事件と深い関係があり、早苗さんの心の中に1年経過後も強い悔恨と自責の念が根を張っていた。また、殺人事件で亡くなった3人も現世への執着の意識が強く残っていた為、それらを解放し、そのことによって早苗さんの意識の引っ掛かりを無くすという難題をクリアできた。早苗さんの純粹意識としては、竹下さんへの愛が働いており、その意識をベースに竹下さんを呼び戻すことができた」と記入した。そして、第10番目のケースの次のページに第11番目のケースと記入し「亜希子の青森へのテレポーテーション」と記入した。背後から覗き込んでいた亜希子が言った。

「わたくし4回も消えてしまっているのですね。今度消えたらそのまま戻って来られなくならないか不安ですわ」

「亜希子は他の人よりこの世界との繋がりが弱いだけだよ。俺がいる限り守り通すよ。だから不安を抱いてはいけないよ。自分の好まない方向に向かってしまう可能性を高めるからね」

「はい、気を付けます。よろしくお願いします」

亜希子が直立不動の姿勢で身体を2つ折りにして敬礼したので、賢は吹き出してしまった。亜希子も一緒になって笑った。そして笑いながら賢は亜希子の身体を引き寄せて抱き締めた。

「どこに行っても連れ戻すから大丈夫だよ」

「はい」

二人は前の日と同じように一つのベッドで毛布にくるまって寝た。しばらくの間しっかり抱き合っていたが、ふたりともほぼ同時にものすごい睡魔に襲われてそのまま眠りに落ちた。亜希子が目を覚ましたのは7時過ぎだった。賢は亜希子の浴びているシャワーの音で目が覚めた。亜希子が身体にタオルを巻いて部屋に戻って来た。

「おはようございます」

「おはよう・・・電車は何時があるかな？」

「あなた、飛行機で帰りませんか？」

「そうだな、早く着くし、それにお昼頃の便で帰ればそんなに慌てなくてもいいし」

亜希子がフロントに電話して飛行機の予約について聞いた。すぐに昼の便が取れるとの回答があった。亜希子は2席の予約を頼んだ。ふたりは朝食を済ますと、支度を調べてホテルをチェックアウトした。10時半頃空港に着いた。賢は先ず、航空会社のカウンターに行って、チケットを手に入れた。それから空港の売店でみやげ物を買った。祐子には津軽民話の本とずぐりという漆塗りの独楽を、数馬と亮子には夫婦湯呑みとはと笛を買った。そして亜希子に両親へのみやげを選ぶように促した。亜希子は津軽漬がいいと言った。それは安いものだった。亜希子はそれで十分だと思った。賢は藤代夫妻に漆塗りの箸を買って亜希子に持たせた。席は亜希子が窓際、賢が通路側になった。

機内から見える空港廻りの景色は雪景色で白一色だった。亜希子は空から見る景色の中で雪景色が最も好きだ。一面の白の中に所々褐色の背の高い建物が見える。まるで雪の中から芽を出している土筆のように見える。

「白が美しいわ。早苗さん達どうしているかしら」

「警察に連絡しているだろな。何しろ事件絡みだから、これからの対応が大変だよ」

「あなた、失踪やテレポーテーションのこと教えて頂けないかしら」

「うん、あくまで俺の仮説だけど、それでいいか？」

「はい、あなたの考えていらっしゃることを知りたいのです」

その時機内放送があって、スチュワーデスが賢にベルトを締めるのを促した。亜希子は既に締めてある。

「うん、まずテレポーテーションから話すと、量子力学にバイロケーションという現象があることを知っているか？」

「いいえ、知りません」

「電子を一つの箱に閉じこめて、その箱を真ん中で2つに切って、二人の人が、一人が箱の片側を東京の研究室に、もう一人の人が箱の片側をロンドンの研究室に持って行ったとする。そうすると、電子は東京かロンドンのどちらかの箱に入っているはずだろう。二人が東京とロンドンに居て連絡を取り合い、先ず東京にいる人が箱の中を見ると、電子があ

る。次ぎにその箱を閉じて、今度はロンドンにいる人が箱を開けると、そこにも電子がある。まるで電子が瞬間移動したような感じなんだ。入れた電子はたった1個なのに、2つになって顕れる。これがバイロケーションだ。これは量子の世界の話だけど、実際にこの現象を自分の身体で起こしている人が過去に何人もいるんだ。ある場所にいた人が同時に別の場所にいることを第3者に確認されている。例えば、1600年代の有名な話がある。スペインのメアリーという修道女の話だ。スペインのカトリック修道院に生活していたメアリーがテレポートして中央アメリカで宣教活動をしていたらしい。これをどう解釈するかが問題だ。今の自然科学の常識では説明できないことだ。自然科学は量子テレポーターションという量子の相関性の性質と情報伝達という方法を使ったテレポーターションの実験に成功しているというけど、それは3次元に限定した移動で、生物の様な複雑なものを情報分解して遠隔地でその情報に基づいて再構成してテレポートするなんてことは現代科学では無理な話だ。しかし、現実人間や物質のテレポーターションは起きている。俺の考えでは、この世界にある物質の実体は別の所にあつて、その実体の写像がこの3次元世界と、虚次元の世界に分離して投影されているのだと思う。自分の意識が完全に純粹になり切れればこの分離は無くなって、真実虚3身一体になり、その時は自分の意識に従った状態が現出するのだと思う。現状態から別状態へのシフトがテレポーターションで、投影が虚世界だけに為されたり、中断されるとこの世界から消えるんだと思う。つまり、不完全な像の創造は消滅という事態を招くんだと思う。この3次元空間から虚次元空間を見ると、時間も空間も無い。逆に虚次元空間から3次元空間を見ると同じように時間も空間も無く感じられる。実次元から虚次元に移ると消えた様に見える。二つの次元は実は表裏一体なのだ。この2つの次元の一体化と意識の生起で宇宙と自分が一体になれる。そして、この状態ではこの世界の全てを創造し、認識できる。これがある意味での悟りだ。すべて振動を通して創造し認識する。光も音も思考も全て振動だ」

「わたくし、テレポーターションしている間は何の意識もありませんで

した。この世界から消えている間の記憶も、意識もありませんでした。鹿児島で失踪していた時は違う世界に居て、ずっとあなたと一緒に生活していたのに、これはどういうことでしょうか？」

「今言ったように虚次元はこの世界から見ると時間も、空間も無いんだ。だから意識が目覚めていないときは当然その間の記憶もない。この世界に戻って来て初めて時間と空間という認識が生まれるんだ」

「その間、こちらの世界では時間が経っていますのに、何故でしょう？」

「元々時間というものは無いんだよ。それに空間も無い。人間の意識が作り出しているだけだ。そういった観点で物を見ると、自分の脳がこの世界を創造しているのが分かる。先ず、目を瞑ると何も無くなる。音がする。耳を塞げば何も聞こえない。触ると分かる。しかし触っても何が何だか分からない。見たものをあると思っているから触った時それとを感じる。全て脳が作り上げた虚像なんだ。うまくできているよ。元々すべての人間は一つだから、全員の認識への概念は共通している。認識しているものも共通しているに決まっている。思考が個別化を作り出している。思考を止めれば、実体が顕れてくる理由はそこにある。全て感覚を通して認識している。その認識は脳がやっている。今感じている世界は自分の中の世界だ。本当の外側の世界、つまり実世界は瞑想なんかを通して自分の中に見えるものなんだ。脳はそれについては感覚が使えないから分からない。脳はいつも逆に見ている」

「そう言われてみれば、そうですね。少し理解できます。と言うことは、わたくしがテレポートしているときは脳の活動が止まっているということかしら」

「受け取る固定的な情報が何も無いから『脳は働きようがない、だから当然記憶も無い』ということだろうな。つまり、俺たちは脳の作り出した世界に捕らわれて、それに突き動かされて生きているってことだ。変化を感じているからだ。しかし、実際は脳も無いということになる。これも自分であると認識しているからあると感じる」

「何か、般若心経の世界のようですね」

その時、通路を挟んだ隣の席に座っている頭髪を刈り上げた4、50歳

の男性が賢に話し掛けてきた。何処かの仏門に属している人のような印象を与えるが、背広にネクタイという服装だ。賢は少し違和感を覚えた。

「失礼ですが、失踪事件に関係されている方ですか？」

賢は不意に話し掛けられてその応えに戸惑ったが、一呼吸置いて応えた。

「はい、少し」

「実はわたしは青森の常念寺の住職をしているものですが、今のお話を伺っていて、いえ、聞こうとして聞いた訳じゃないんですが、聞こえて来ましたので・・・でも、なるほどと思いました。よく、そこまで、探求していますね。驚きです」

「ご迷惑をお掛けしました。わたしは東京に住んでいるものです。こちらは友人です。今、一緒に失踪事件について調べています」

「やはり、そうですか。実は1年ほど前千歳空港でわたしの目前で一人の青年が失踪したんです。その時はわたしも気の所為かとも思いましたが、ほんの瞬きをした瞬間に消えてしまいました。わたしの並んでいた列の隣の列に、仲間から少し離れて並んでいた青年だったのですが、少しして大騒ぎになりました。わたしも彼を見ていましたから、実際消えたと思ったのですが、自己保身でしょうか、自分で自分の見たことが信じられなくて、自分の見た事実は口にすることができませんでした。寺ではいつも檀家の人たちに、人の生と死の話をしているのですが、その話と自分の見た現象が矛盾するので逡巡してしまったのです。今のあなたの話を聞いていて、何かあの事件の理解への道を垣間見たような気がしまして」

「そうでしたか。わたしは般若心経の世界は、この世界の真実を言っていると思います。でもそれも、あくまでこの現象世界のことについてだと思います。札幌の失踪事件の現場におられたとのことですが、その時失踪した青年はどんな印象でしたでしょうか？よろしかったら教えて頂けますか？」

「あの事件のことが心に引っ掛かっていましたから、よく憶えています。あの人は仲間から離れていましたが、意識的に離れていたと謂うより、ただ、ぼーっとしていて離れてしまったようなのです。どこかを見つめ

ているようでしたが、何かを見ているという風でもなかったように記憶しています。それが気になってその人の方を何度も見たのですが、こちらに顔を向けているのに、わたしの動作には全然気付かないようでした。消えたのは瞬間でした。本当に瞬く間に消えました」

「そうですか。とても参考になりました。ありがとうございます」

その僧侶は名刺を出した。それを受け取りながら、賢は「名刺は持っていません」と言った。僧侶は賢に住所と氏名を聞いて手持ちの名刺の裏に書き込んだ。

「できたらいつかまたお会いしたいと思います」

「はい、又その節はよろしくお願い致します」

それから暫くは、賢も亜希子も無言で居た。亜希子は人目に触れないようにして賢の手を握っていた。飛行機が着陸態勢に入るとのアナウンスがあった。海の上を飛んで羽田に近付いた時、外の景色を見ていた亜希子が言った。

「あなた、東京は久しぶりでしょう。このままマンションに帰りますか？」

「いや、先ず亜希子を家まで送ってゆくよ。お父さんにも会いたいしな」

「よかった！一緒にお食事をいただきましょう」

賢は荷物を機内に持ち込んでいたので、ターミナルから出てそのまま出口を潜ることができた。亜希子はみやげ物を持っているだけだった。ふたりは出口を抜けて外に出た。

「お帰りなさい！賢さん、亜希子さん」

祐子の元気な声が聞こえてきた。祐子と登紀子が迎えに来ていた。

「お帰りなさい。賢さん、亜希子をご迷惑をお掛けしてしまって、申し訳ありませんでした。無事戻られて安心致しました」

「亜希子さんに直ぐに戻って頂くかとも思いましたが、わたしの勝手に、今度の調査を手伝って頂くことにしました。おかげで大変助かりました」

「お母様、お姉様、ごめんなさい。わたくし自分でもどうしてよいか分からなくて。賢さんに甘えてしまいました」

祐子は苛立ちを堪えた。賢の胸に飛び込みたかったが、その衝動を抑えた。運転手が賢の荷物を車まで運んでくれた。4人は自家用車で青山の家に向かった。青森から東京に戻ると周囲が静から一気に動に替わったのを感じた。巨大な製造工場の中に入って来たようで、刺激は強いが感動は無い。青山の家には5時少し前に着いた。家政婦が門まで出て迎えてくれた。

「お嬢様お帰りなさいませ。お疲れになられたでしょう」

家政婦は自家用車の窓を開けて顔を見せている亜希子に話し掛けた。亜希子は微笑んだ。

「ただいま！わたくしは元気よ。心配掛けてごめんなさい」

運転手が玄関の前に車を停めて4人を降ろし、トランクから賢のトラベルバッグを取り出し家政婦に渡した。賢は直に応接間に通された。三人の女性も一緒に部屋に入った。賢は登紀子に案内されてソファの中央に腰を降ろした。亜希子が賢の右隣、祐子は奥の左隣に腰掛けた。登紀子は賢に向かい合ってシングルチェアに腰掛けた。賢はトラベルバッグから小さな包みを3つ取り出して祐子に2つ、登紀子に1つ渡した。祐子も登紀子も微笑みながらそれを受け取ってすぐに開けてみた。

「賢さん、ありがとう」

「賢さん、ありがとうございます。お疲れになられたでしょう。先ほど車の中でニュースを聞いたのですが、青森の事件の真犯人が判明したそうですわ。逮捕されて取り調べを受けていた暴力団の栗原という男が殺人を自供したと言っていましたのよ。それに容疑者の一人だった失踪中の大阪のサラリーマンも発見されたとのことでしたわ。賢さん、今度の調査はこの為だったのですか？」

「はい、大阪の男性は竹下さんとおっしゃる方なのですが、無事失踪から帰還しました。亜希子さんとわたしがこの事件で義母と娘二人を亡くされた大河原早苗さんという方の意識を解放して、竹下さんを帰還させるお手伝いをしたのです。うまくゆきました。今朝、大河原早苗さんと竹下さんが警察に報告したのでしょうか。この失踪事件は一応解決しました」

「それは、それは、おめでとうございます。亜希子はお邪魔になりませんでしたでしょうか？」

「お母様、わたくし、いつまでも子供じゃありませんわ！わたくしも一生懸命賢さんのお役に立とうと頑張りましたのよ。もっとも賢さんにとってはお荷物だったと思いますが・・・それにも拘わらず、賢さんにとっても優しくして頂きました」

亜希子は賢の顔を見たが、その時祐子の鋭い視線とぶつかって目を伏せ、丁度家政婦が持って来た茶を手にとってそれを一口飲んだ。

「亜希子、あなた、お洋服はどうしたの？パジャマのまま遠隔移動してしまったのでしょうか？」

「はい、とても大変でしたの。でも今思い出すと楽しくなります。翌日わたくし、パジャマを脱いで、代わりに賢さんの着替えた洋服を着て、賢さんに連れられて青森の駅前のデパートに行ったのです。とっても恥ずかしかったわ。でも、なんだか冒険をしている様で一寸スリルがあったわ。そこで賢さんにブラウスとスカートと、この麤脂のセーターとコートを買って頂いたの。この麤脂のニットのセーターとても気に入っていますわ」

「賢さん、何から何まで本当に済みませんでした。亜希子、そのセーターよく似合っているわよ」

「わたしもどうしていいものか途方に暮れましたが、幸いホテルの近くにデパートがありましたので助かりました。外は雪が降っているんです。凄く寒かったんですよ。亜希子さんが風邪を引かなければいいと思っていました。でも、何とかかなりましたね、亜希子さん」

「はい、おかげさまで。最初の日は凍えそうでしたけど。いいえ、二日目も寒かったですわね」

「何しろ、雪の中の移動でしたから、四苦八苦で。特に雪に対する備えもしていなかったのが随分寒い思いをしました」

祐子は賢と亜希子が二人で行動していたことに対する嫉妬心で頭が熱くなっていたが、冷静さを装って話に加わった。

「遠野や秋田も随分寒かったけど、青森はもっと寒かったでしょう？」

「両方とも寒いんで比較はできないけど、青森の寒さは肌が痛いと感じるような寒さだった。なあ、亜希子さん・・・そう、最初の日には早苗さんの家から雪の中をホテルに戻ったんだけど、薄暗がりの中、雪が降っていて、そのうえ風があつて、積雪の中に膝まで足を突っ込んで一歩ずつ歩いたんだ。おまけに道路の雪解けの水が靴を突き抜けて足の骨の髄まで染み込む様だったよ」

「わたくし、震えてしまいました。それに駅の自動販売機は売り切れで、賢さんがいらっしゃらなかったら、きっとわたくし卒倒していたと思います」

「大変だったわね。そんな天候の中で助けてもらって、大河原早苗さん達今頃きつと感謝しているわよ。でも、大河原早苗さんは家族を失ったショックと絶望で苦しんでいたんじゃないの？ どうして、こんなに早く竹下さんを呼び戻せたのかしら」

「うん、心に幾つかの大きな引っ掛かりがあつたんで、その解放から始めたんだ。まず、お義母さんかあに対しては済まないという気持ちと、自責の念が強く働いていたんだけど、その影響もあつてお義母さんの意識がまだこの世界に張り付いていたんだ。それは何とか解放したんだけど、意識の深層に二人の娘さんへの気持ちが強く結び着いていて、これを切り離すことが一苦勞だった」

「賢さんは、早苗さんに対して退行催眠を掛けて、トラウマを解消させたのです。とても素晴らしかったです。わたくしも涙が流れました。早苗さんが泣き崩れてそれで執着から解放されたのです」

「わたくしも是非拝見したかったわ。賢さん、催眠術もできるのね」

「以前、アメリカにいた時に父から教わったんだ。アメリカではよく治療に使われているんだ」

「お父様は、アメリカでお医者様をなさっていらっしゃるのでしたわね」
登紀子が聞いた。亜希子は初耳だというように驚いた顔をした。

「はい、アリゾナの大学病院で医師をしております。父は日本人ですが、現在アメリカの永住権を持っています。母はイギリス系のアメリカ人で総合病院に勤務していましたが、仕事を通じて父と知り合ったと聞いて

います」

「ご両親は、日本に来られることはないのかしら？」

「はい、休暇でも取れば、その気になるかも知れませんが、いつも忙しそうで、今のところそんな気配はありません」

「ごめんなさい。立ち入ったことを伺ってしまって」

「いいえ、僕はアメリカと日本の両方の影響を受けています。どちらの国も好きですが、自分の中ではどちらかというとならば日本的な意識の方が強く働いているように思います」

応接間に藤代肇が姿を現した。

「内観さん、お帰り！ 亜希子、無事でよかった。随分迷惑をお掛けしたんだろう」

「ただ今戻りました」

「お父様、申し訳ありませんでした。賢さんのお陰で無事戻ることができました」

「あなた、内観さんから漆のお箸を戴きました」

「それはどうもありがとうございます。久しぶりに全員揃ったな。賢さん、食事を一緒にして頂けますか？」

「はい、ありがとうございます。お言葉に甘えてご一緒させていただきます」

「食事の支度が調うまでの間少し話してもいいですか？」

「はい」

「電話でも言いましたが、そろそろ今度のプロジェクトのメンバーを確定する段階になっています。明後日の午後6時に、この間の料亭に君の補佐をしてくれるメンバーを呼んだので、同席して頂けますか？」

「はい、よろしくお願い致します」

「このプロジェクトは10年以上に渡って続くプロジェクトだから、それなりの人物を集めているんだ。最初は君への反発があって少しきついかも知れない。相手が博士級の者ばかりだからな。しかし、是非やり遂げて欲しい」

「はい、全力で取り組ませて頂きます」

「この件はそのくらいにして、今君の取り組んでいる失踪事件について、

解明できたところまで説明して欲しいんだ。出来るだけわたくしにも分かるようにな」

「まだ現象的なことを少し認識できた程度です。それも、あくまで仮説に基づいた認識です。失踪事件について考える前提として、この世界の捕らえ方を変える必要があると思います。この世界はわたくしたちが五感で感じているだけの世界じゃないということです。五感が感じる世界は物質的な世界で、その物質的世界と結びついた虚次元の世界が存在すると考えざるを得ません。この虚次元の世界は一般に霊の世界、意識の世界、天国、地獄など様々な形態で捉えられているのだと思います。更に物質的な世界と虚次元の世界を作り出している原型の様な真実の世界が存在するはずで、これが宇宙開闢の頃からの原型で、わたくしたち全てが一つに繋がっている世界だと思います。これらの3つの世界が調和しているとき、自分から見た世界は安定して、至福に満たされていると思うのです。そしてその調和された状態になると人間の意志に基づいて全てのものが創造されると考えます。人間は創造のできる唯一の存在だと思います。人間は人間自身をも創るように運命付けられていると思います。実は現在のこの世界も我々の意識が創り出している世界だと思えます。しかし、我々の意識は過去からずっと継承してきている概念で雁字搦めになっていますから、自ずと世界はそのまま我々の認識した通りの形になって顕れているわけです。だから、もし、自分が外界のものに対する概念を全て捨てて、純粹意識になり切れば、少なくとも自分が視ている世界には自分の思う通りの状態が現れるはずです。例えば自分が誰かの元に行きたいと考えるとそれがそのまま実現して、遠隔移動つまりテレポーテーションが起こると思われるのです。これは亜希子さんのケースでもよく分かります。純粹意識で形を創造できたとしても、それがうまく現実の世界に適合しない場合や、向かう方向が定まらない場合、戻ろうという意志がない場合などは、この世界に顕現できなくて失踪状態になると思います。先ず、失踪事件の起こった時の失踪者の状態ですが、意識が純粹な状態で、何かに集中している時に消えたように思えます。しかし、そのまま失踪した状態になっている原因は失踪事件毎

に別々のようです。現在量子科学でパイロケーションや量子テレポーテーションなどという現象について研究が進んでいるようですが、意識と量子は同じもの、意識と空間も同じもので、つまり全ては一つであり、形も大きさも何もなく、唯大きな意識が分離して全体を認識しているのだという最も大切な一点を、現代科学は見落としているのだと思います。物質的な視点からだけでは真実の解明ができないと思います」

藤代肇をはじめ、4人の女性も全員が賢の話に集中した。藤代肇が口を開いた。

「大分、理解が進んでいるようだな。君の言っていることの何処までが真実かは分からないが、もしこれが真実だとすると、今度のプロジェクトは思いも寄らない成果を生むことになるかも知れない。日本人の意識を本来の方向に誘導できるかも知れないな」

「わたくしの仮説は、今度のいろいろな体験から導き出したものです。現実の世界をよく見直してみると、世界がそうなっていると思うのが一番腑に落ちます。太古の人々は直感的にこのことを知っていたように思えてなりません。でも、矛盾するかも知れませんが世界全体が完全に先ほど申し上げた現実・虚次元・真実の3身一体を実現すると、宇宙の変化は止まり、静止状態になってしまうんじゃないかと思います。そんなことは現状では不可能でしょうが。でも、このように変化している世界に生きていられる自分はいろいろなことを体験できて何と恵まれているんだろうと思います。ですから、わたくしが参加させて頂くことになっている意識改革プロジェクトの方向はあくまで究極の「静」を実現しようとする方向に向くのが理想だと思いますが、そこに至る過程で展開されるあらゆる人間の営みを一切否定しないという前提が必要ではないかとも考えています」

「プロジェクトにはいろいろな考えを持った人たちがいるから、その考えをまとめて一本の柱にするには相当の忍耐と努力が必要になるだろうな。兎に角頑張ってくれ」

「はい、まだ仮説を立てられないことが山のようにありますから、それら一つずつ解決して行きたいと思います」

祐子が言った。

「お父様、わたくしもそのプロジェクトに加えて頂くわけにはゆきませんか？」

「いまはまだプロジェクトの企画段階だから、検討することはできる。祐子、亜希子、お前達二人は一生内観さんと一緒に生きると決意したのだろう。あの時はあまり突っ込んだ話をしなかったが、これからの人生を一人の男性とどのようにして共に生きるか、自分たちの意志をはっきりさせておいた方がいいな」

祐子は藤代肇が自分をプロジェクトのメンバーに加えてくれると約束してほしかったので、少し歯痒かった。亜希子は暫く下を向いていたが、視線を上げずに言った。

「わたくし祐子お姉様のように賢さんのプロジェクトをお手伝いできるような能力は持っていません。でも、もう決めました。賢さんからは絶対に離れません。苦しんでいる人を救う為に一緒に生きたいと思います」祐子も言った。

「わたくしは、亜希子さんのような純粋な気持ちはありません。でも、賢さんと一緒に生きてゆくことは動かしようがありません。わたくしは賢さんの子供を産み育てたいと思っています」

「今の法律の下では、賢さんは二人と結婚することはできないんだぞ」
「わたくしは祐子さんとも亜希子さんとも誰とも結婚しないつもりです」

「ふたりとも、そういうことようだ。それでもいいのか？」

ふたりは黙って頷いた。しかし、祐子も亜希子も最後に賢の言った言葉がいつまでも耳に残った。

少しして家政婦が部屋に入って来て登紀子に食事の準備が出来たことを伝えた。藤代に促されて全員ダイニングルームに向かった。

食事が済んで、暫く寛いでから、賢は藤代に暇乞いをした。藤代は運転手に賢をマンションまで送るように指示した。賢は一度辞退したが、登紀子にも言われてふたりの好意を甘んじて受けることにした。賢がマンションの部屋に戻ったのは8時過ぎだった。賢は自分が相当疲れていると感じた。トラベルバッグを入りに放り出したまま、灯りを点け暖房

のスイッチを入れた。ソファに身を投げると賢はそのまま眠りに落ちた。翌朝は早くに目が覚めた。すぐにシャワーを浴びると、トラベルバッグの中を整理した。先ずみやげの袋を二つ取り出して床に置いた。何もかもぐしゃぐしゃに押し込んだトラベルバッグの中から、ずるずると衣類を引っ張り出すと自分の衣類に絡みつくように亜希子のパジャマが出て来た。賢は衣類を抱えてバスルームに向かった。その時インターホンのチャイムが鳴った。亜希子と祐子がゲートに来ていた。ロックを解除するとふたりはすぐに部屋にやって来た。ドアを開けるや否や、祐子が言った。

「おはよう！よく眠れたでしょ」

「おはようございます」

ふたりはそれぞれ、大きな紙袋を手をしている。

「やあ、二人お揃いで早いじゃないか」

「あなたのお食事の支度をする為に来たのよ」

「わたくしは、お洗濯とお掃除を致します」

「それは助かる。今日はいろいろ話をしたいな。それに遠野のことも、青森のことを整理したいと思うんだ。祐子からは早瀬由美さんのことも聞きたいしね」

「ええ、久しぶりのような気がするの。今日は、ずっとあなたと一緒に居たいわ」

祐子はキッチンに立って、持って来たエプロンを掛けながら振り向きざまに言った。亜希子は入り口に開けたままの状態になっているトラベルバッグを、両手で抱えるようにしてソファの横に持って来た。トラベルバッグの中の衣類が何も無い。

「賢さん、衣類はどうされましたか？」

「これから洗濯しようとしていたところだ。洗濯機の所にあるよ。亜希子のパジャマも一緒だよ。だけど、亜希子は自分で洗濯したことがあるのか？」

「はい、上手にできるかどうか知りませんが、母が「女がすることは何でも学びなさい」と言って教えてくれました」

亜希子は洗面所に行き洗濯を始めた。衣類を下着と上着に分けて、まず下着類から洗った。賢の下着も、自分のパジャマも一緒に洗濯機に放り込んで洗剤を分量を確かめて入れスイッチを入れた。そうしておいて、賢の色シャツを手洗いした。下着類を洗った後、ズボンと上着を洗濯機に放り込んでスイッチを入れた。亜希子は洗い終わるまで洗面台の周りや鏡を拭き掃除した。洗濯が終わると、バスルームに張ってある2本のロープにそれらを掛けた。賢のシャツやズボンはハンガーに掛け、下着類は直接ロープに掛けた。自分のパジャマもロープの端に寄せて掛けた。洗濯が終わってソファーに戻ると祐子が食卓に食事を並べ終えたところだった。賢は二人の女性が立ち働いている間にみやげ物の包みを棚に置いてから、トラベルバッグの中身の残りを整理しノートを書棚に戻した。朝起きたばかりの部屋の空気がすっかり変わった。祐子も亜希子も美しく清々しかった。

「準備ができたわよ。食事にしましょう」

三人は揃って食卓に座った。祐子と亜希子は朝目を覚ますと、食事をせずに家を出た。申し合わせていた訳ではないが、部屋を出た所で顔を合わせた。ふたりとも前日の内に賢のマンションに行く支度をしてあった。祐子は昨夜行きたいと考えていたが、家族の団欒から抜け出せなかった。祐子は床に着く前に「きっと疲れて寝てしまっているわ。今日はゆっくり休んでもらいましょう」と、自分に言い聞かせた。亜希子は自分自身も疲れていた為、湯に入った後そのまま床に着いた。賢の優しさを思い出して夢心地だった。賢の元に行きたいと思ったが、またテレポーテーションが起きることを懸念して意識を部屋の天井に向けた。賢の胸の中で眠った記憶が蘇って来て興奮してなかなか寝付かれなかった。

「今朝は洋食よ。トーストにゆで卵、ベーコンとハム、レタスと人参のサラダ、それにジュースとコーヒー。シンプルな朝食にしたわ」

三人はジュースを手にして乾杯のポーズをとった。賢が交互にふたりの女性の目を見て乾杯をした。ジュースを飲み干すと、祐子は3つのカップにコーヒーを注ぎながら言った。

「わたしどうしても分からないことがあるのよ。それはね、今まで失踪

した人たちは大勢いるでしょう。その人と一緒に居た人たちは、失踪した人を探し出すことに躍起になったと思うの。その人が恋人だったりしたら、心の中で必死に呼び戻そうとしたと思うのよ。でも、これまで、誰一人として、時空間を超えて呼び戻しに応じて帰還できた人はいなかったでしょう。少なくともそんな話は聞いたことないでしょう。それなのにわたしたちはどうして失踪した人達を呼び戻せたのかしら」

「祐子、それは過去に失踪者を呼び戻そうとした人達は、この世界に対する認識の仕方が適切じゃなかったからだと思う。祐子は3D画というデザイン画を見たことがあるか、亜希子はどうか？」

祐子はあると言ったが、亜希子は知らないと答えた。

「亜希子、3D画って言うのは、立体感覚で見ると一つの別のイメージが浮き上がって来るように描かれた画のことだ。一寸見ただけでは、唯のデザイン画のようなのだけど、その背後に3Dイメージが潜んでいる。あの3D画は最初に見た時はそれが3次元立体の画だとは全く分からないだろう。ところがじっと見つめているとイメージが浮き出てくる。そして、今度は今までの平面的な形は無くなって、実はそれが3Dイメージの画だったのだと認識する。あれと同じようなことがこの世界の認識でも起きるんだ。そのイメージングはあの3D画に比べれば格段に難しい。それもそのはずで、今まで俺たちはあらゆる条件を与えられてこの世界が今見えている世界だと認識しているからだ。3D画は範囲も狭いし、元の画は普通の平面的な画だし、最終的に見える画はこの3次元の常識的概念で認識できるものだからね。だから比較的簡単にイメージングの切り替えができるんだ。ところがこの世界はあまりにも秩序立って見える。何処にも矛盾が無く完全なように見える。まさか、この背後に別の世界があるとは思えない。我々はものを観るとき3次元空間を2次元に投影して観ている。だからあの3D画のようなルールが成り立たないので、その別の世界を直ぐには認識できない。この世界を写像の世界と見なすと、原型の世界は次元の上の世界になる。つまり4次元以上の世界だ。俺は、我々の脳は4次元を認識できるようにできていると思う。しかし、3次元的な見方しかしていないから4次元が見えない。4次元

的な視点でこの世界が見えるようになると、世界の様相は一変する。失踪者を呼び戻す為には、先ずそういう感覚で世界を観る必要がある。その上で意識を自分の内側に向けると真実の世界が見えて来る。真実の世界に失踪した人も存在していることが分かる。その真実の世界からこの世界に写像を投影できる正しい位置まで失踪者を誘導したのが、今回我々が行った呼び戻しと言う行為に他ならない。おれはそう考えているが理解できるか？」

「何となく分かるわ。あら、ごめんなさい。わたしが変な質問をした為にトーストが冷めてしまったわ。あなた、お食事をいただいてください」亜希子は賢の話に聞き入っていたが、もっと続きを聞きたいようで呟くように賢を訪ねた。

「お食事を進めながら、答えてくださいますか？わたくし、今のお話の中の4次元というものが想像できませんが、もう少し説明していただけますか？」

トーストを口に放り込みコーヒーを啜ってから賢が言った。

「俺の考えるこの世界の真実の姿は4次元構造、いやそれ以上の次元の構造をしているんだと思う。唯、我々が3次元的にしか認識できていないだけだと思うんだ。その4次元は、3次元の観点から見ると確率的な世界だと思う。あらゆる可能性を包含している世界。その世界を認識できるようになると真実が見えてくるのだと思う。本来、我々は4次元世界を認識する力を持っていると思うんだが、確率的な存在を俯瞰できるように訓練されていないから、これまでの常識や歴史的な経過に基づいた3次元の形の世界を顕現させているんだと思う。だから、一旦4次元世界を認識できるようになると、自分の意志によって何でも自由に顕現させられる。ある状態を切り取って写像化するとそれが3次元世界として現実化する。それは、よく言うような3次元の要素に時間という1次元を加えたような4次元ではなくて、唯今のこの3次元にもう一つのディメンションを加えたものだと思う。その追加されるディメンションのスケール上では、3次元の世界がパラレルワールドのように同時に展開される。しかし、それはあくまで確率的にだ。今我々が見ているこの世

界はその4次元の、いや真実の世界を我々の意識で投影した写像の世界だということだ。写像とは言っても物体として存在を認識できる世界だ。我々が4次元あるいはそれ以上の次元の世界の存在だとすると、この世界は3次元的な切り口で覗き込んでいる世界だと思う。それはいいかい、こう考えると分かってくる。普通、我々は生活しているときは自分の居る世界を3次元世界だと思っている。こうしてテーブルの上を見てみると、そこにはいろいろな模様が描かれている。しかし、それは2次元に固定されていて動かない。2次元の面の上のものが動いたら不気味だけどな。4次元の場合も同じで投影された時は3次元だ。しかし、それは常に変化している。変化の途中である特定の状態に固執すると、3次元世界に固定される。まあ、一種の執着だな。一方、変化している全体を観るとそこに、時間という概念が生まれる。時間という概念を使うことで、4次元を3次元に固定しているんだ。歴史上の事実はその固定された3次元の像だ。この現実から変化という現象はそのままにして時間という概念を取り除くと、この世界が4次元の世界だということが分かる。つまり、真実の世界を3次元世界に投影しているのは自分の意識だと言うことだ。4次元の真実の世界は確率的な世界で、自分の意識で確定させる世界だから、自分が選択することによってある特定の3次元の世界が顕れる。自分の決めた通りの状態が顕現するという訳だ。これで分かるか？むしろこんがらがったかも知れないな」

賢はそう言いながら、ゆで卵の殻を割り始めた。祐子が自分の前にあった卓上塩の瓶を賢の前に置いた。

「賢さん、わたくしはまだよく分かりませんが、この世界が4次元の世界だとおっしゃるのですか？」

「そうだ、4次元以上の世界だと思う。ただ我々のほとんどはこの世界を3次元の世界として認識している。それは時間という概念で場面場面を切り取って認識しているからだ。一旦その3次元認識を4次元認識に切り替えられたら、あの壁を通り抜けることもできるし、瞬間にどこにでも移動できるし、3次元世界から消えたり顕れたりもできる」

亜希子はコーヒーを飲んでから言った。

「まだ、よく分かりません。消えたり、顕れたりできるというのはどう
いうことでしょうか？」

「いい例がある。4次元世界という本の中で、著者の梶本博士が説明に
使った例だけど、2次元に生きる生物がいたとする。そこに3次元に生
きている人間が悪戯をする。ボールを持って来て、その2次元世界を通
過させるんだ。そのボールを2次元の生物の目の前で通過させる。2次
元の生物は初め小さな点が顕れたと思う。その点が次第に大きな円にな
ってくる。そして暫くすると、今度は次第に小さくなって行ってそして
終に消えてしまう。2次元から見た3次元の事象を3次元から見た4次
元の事象に置き換えて捉えたと、失踪事件はこんな風に考えられるだろ
う」

亜希子が嬉しそうに言った。

「今のご説明でよく理解できました」

今度は祐子がサラダを食べていたホークを置いて言った。

「段々分かってきたわ。でも壁の中を通り抜けることができるって、ま
だよく分からないわ」

賢はコーヒーを一口飲んでから言った。

「今の2次元の例で考えると分かるよ。2次元の世界に壁があったとす
る。その壁は2次元では線のことだ。その壁の横からさっきの生物が壁
を見ている。そこに3次元のさっきのボールが近付いて来る。2次元か
ら見るとボールは円でしかない。その円が壁の手前まで来たとき、3次
元の人間はそのボールを2次元平面から外して、壁の反対側に持って行
ってまた2次元平面の中に入れる。2次元の生物から見ると今まで目の
前にあった円が壁の手前で小さくなって点になり、壁の反対側に初めに
点が現われ、次第に大きくなって元の円が現われる。それは2次元内で
見ると空間的に移動したということではなくて、壁を通り抜けて、向こ
う側に現れた様に見える。3次元で壁を通り抜ける場合も同じだ。3次
元内で空間的にジャンプしたのではない。4次元の空間を経由して壁の
向こうに顕れたことになるんだ。実際は4次元では3次元的空間と時間
の意味を失うから壁を通り抜けるということ自体意味の無いことになる

けどね」

「あなた、何となく分かったような気がするわ」

「ここまで来ると、それじゃどうやって4次元の認識を得るかということになるんだが、兎に角現在の常識的な観念を取り除かなくては駄目だ。これがそう簡単じゃない。何しろ生まれてからずっと、いや、この生より以前の生でも繰り返し繰り返し同じような認識で生きてきているから、それが潜在意識の中に根を下ろしている。それから逃れる為には工夫がいる。この潜在意識が思考に影響を与えて何かを感じたり、ものを考えさせたりしている。だから潜在意識が働かないようにすることが必要だ。それじゃどうするかということだけど・・・前にも言ったと思うけど、4次元を観ることが第3の目を開くか、あるいは、もっと簡単な方法は瞑想だ。第3の目を開くことはそう簡単にはできないし危険が伴う。だとすると瞑想しかない。思考を止めて自分の内側に入ってゆく。ものを意識することも止める。唯浮かんでくるものを見つめている—それだけの状態をつくる。そして、何も浮かんで来なくなったら、その時初めて意志を働かせる。自分が望んでいることが既に実現した場面を想定してそれに感謝をする。その行為は自分の意識の底に確信を植え付けることなんだ。心の底の底から確信して、微塵も疑わないことが必要なんだ。そして、その意志を自分の内面全体に反映させるんだ」

「難しそうね、ねえ亜希子さん。わたくしたちにできるかしらね」

「ええ、とっても難しそう。お姉様、4次元の世界が認識できるとどんな風になるのかしら」

「あなた、4次元の世界を認識したことはあるの？」

「それに近いことを体験したことはあるけどね」

「ねえ、それってどんな感じだった？」

「パラマハンサ・ヨガナンダがクリアヨガを通して、認識の転換を体験しているんだけど、彼の自叙伝に「全てが消えて、光に溢れた世界になる」というようなことが書いてあったな。俺もそれに近い感覚を持った。真実の世界から見ると、元々この世界に顕れているようなものは何も無いって訳だ。ところがこの世界から見ると、真実の世界なんてあるのか

無いのかも分からない。だから、変化して存在し続けられる。人間って、本当にうまく創られているよな」

ふたりの女性は賢の話の聞いている内に、食事が済んでしまった。賢は急いで残りを食べた。食事を済ますと祐子は後片付けをした。亜希子もそれを手伝った。賢は掃除機を持って来て居間と寝室の床を簡単に掃除した。ほとんど角を丸く吸い取る程度に手早く済ますと、掃除機を片付けてソファに戻った。祐子と亜希子もソファにやって来て腰を降ろした。

「昨日から俺たちの話ばかりしていたから、今度は祐子が話せよ」

「うん、早瀬由美さんのことね。わたし、また早瀬由美さんの家を訪問してみたのよ。今度は一人だね、2日前だけど。この間訪問した時は由美さんの人間関係や行動面しか聞けなかったでしょう、ねえ亜希子さん。今度はもっと面白いことを聞いたわよ。あの人、恋人がいたようなの。お母さんの想像だけど、相手の人は奥さんのある方で、その人との関係が続けるか分かれるか随分悩んでいたんじゃないかって。お母さんがしみじみ話していたわ。「あの娘は大人しい娘だから、きっと相手に騙されたんだ」って」

「相手の男性は早瀬由美さんのことを探さなかったのかな」

「その男性が誰なのか分からないの。お母さんはそこまでは聞き出せていなかったみたい。何処かのサークルの人だと言っていたわ。それで、由美さんの部屋から、お母さんが心当たりのサークルの名前を見付けてくれたの。そのサークルは以前調べた降霊会とは別の物質化現象研究会というサークルだったわ。わたしそのサークルに行ってみたの。そこは特に秘密のサークルではないようで、見学を申し込んだら快く承諾してくれたわ。わたしが行ったとき実験室のような場所に男5人、女2人の会員が集まっています。いろいろな機械をいじりながら議論していたわ。何かを測定していたみたい。わたしはその中の誰かが早瀬由美さんの恋人じゃないかと思って注意していたの。わたしが自己紹介をして、「早瀬由美さんのことを探しているんです」って言ったら、皆神妙な感じになったの。その中の佐貫さんという40歳くらいの男の方が、「自分も早

瀬由美さんのことを探している、しかし今のところ淨蓮の滝での消滅以上の情報は得られていない」って言っていたわ。もしかすると佐貫さんが恋人かと思ったけど、どうもそんな雰囲気じゃなかったわ。そこで思い切ってみんなに「早瀬由美さんにはどなたか付き合っていた方がいらっしやったのでしょうか？」って聞いてみたの。そしたら、佐貫さんが、「ぼくは時々彼女を誘ったことがあるけど、お茶を飲んで研究会の話しをする程度ですぐに帰ってしまったよ。他には誰とも付き合っていなかったようだよ」って言ってたわ。あそこにいた二人の女性に早瀬さんのことを聴いたけど、二人とも彼女との付き合いはあまりなかったみたいよ」

「あの早瀬由美さんの詩は、神のような絶対的な存在を求めているような詩だっただろう。もしかすると、お母さんの言う相手の男性は、恋人というより親しい友達程度の相手だったんじゃないかな。早瀬由美さんは寧ろ同じ意識を共有できる、伴侶になれるような相手を探し求めていたんじゃないかな。逆に佐貫さんの誘いを遠ざけていたような感じがするな。彼女は理想的な相手を思い描いていて、お母さんはその彼女の抱いているイメージと佐貫さんを混同して恋人と勘違いしていたんじゃないかな」

賢は早瀬由美が淨蓮の滝で話し掛けてきたことを思い出していた。あの時の早瀬由美の言葉を思うと、とても由美に恋人がいたとは考えられなかった。しかし、淨蓮の滝で由美に遇ったことは、約束した以上口に出して説明する訳にはいかなかった。

「わたし早瀬由美さんが所属していたサークルが挑戦していた物質化とか物質転送についても調べたのよ。WEBで調べると一般的なことはある程度分かるのね。さっき賢さんが言った量子バイロケーションや量子テレポーテーションというような、量子レベルでの物質消滅とかテレポーテーションは現代科学でも確認されているのね。でも、あのサークルではそういう実験をしているようではなかったわ。ナメクジを瓶に入れて磁力を掛けて反応を観たり、電場の中に小さなものを置いて、そこに磁力を掛けるような実験をしているって言っていたわ」

「そう、現代の科学者は素粒子レベルでの量子の不可思議な動きは確認はできているけど、それが集まった全体となるともう完全にお手上げだ。ものを細分化して考えている今の科学でも量子への意識の作用は分かってきたけど、ある個体への作用を考える時、全ての量子に一つずつ同じ作用をさせようと考えてしまうから、当然限界が見えてきてお手上げになるんだ。認識の仕方を変えないとね」

「何か難しいわね。ところでその佐貫さんだけど、浄蓮の滝には何度も行っているようなの。早瀬由美さんが失踪したときの周囲の状態を調べたようなの。天候、気温、湿度、風の方向、磁場の強さ、電場の強さ、そのほかいろいろ調べたようなので、わたし「浄蓮の滝の民話を知っていますか？」て聞いたの。そしたら、「知っているけど、あれは寓話だよ」なんて言って取り合ってもらえなかったわ」

「どうも、その研究会も物質的なアプローチでものを考えているようだな。そういう観点も大切なことは確かだけどね」

「そのサークルの中に27、8歳の豪同というごつい感じの人がいるんだけど、その人がその話を聞いていて「僕は民話などに出て来る神隠しみたいな現象も、物質消滅、物質転送と関係していると思っています。よろしかったら食事でもしながら、あなたの考えを聞かせて欲しい」と言ってわたしを夕食に誘ったんです」

「お姉様、それでお誘いをお受けしたのですか？」

「豪同さんの考えを聞いたかったの、近くのレストランならと承知したの。彼の考えている神隠しというのは結局、地磁気とか電場の異常が原因という枠から出ていなかったのね。食事と謂ってもスパゲティだったので直ぐに済んでしまったの。わたし「ここで失礼します」って言ったら、お酒に付き合っただけで欲しいって言い出すでしょ。わたし、逃げるようにして帰って来たわ。彼は初め少しわたしを追いかけて来るような気配を見せたけど、直ぐに諦めて「また、付き合ってください。後で連絡させてもらいます」って背後から大声で叫んでいたわ」

祐子は賢の様子を伺うように見た。何か言って欲しいと思った。賢はそんなことは気にも留めずに言った。

「やはり、普通は女郎蜘蛛なんて信じないよな。神隠しだってそうさ。
祐子、意識の世界から現象を考える奴はそうはいないぞ」

「その豪同さんだけど、あの後何度も電話を掛けてきているのよ。わたし
すっかり電話番号を覚えてしまったの。後でしまったと思ったわ。一
日に何度も。特に夜は困ってしまうわ」

「お姉様、はっきりとお断りになった方がよろしいと思います」

「わたしもそう思っているんだけど、彼はすぐ早瀬由美さんに話を移す
のでつつい拒否し難^{にく}くなってしまっ

賢が漸くその話に乗ってきた。祐子は嬉しいような歯痒いような妙な感
覚を覚えた。

「その豪同さん、早瀬由美さんについて何か知っているのか？」

「詳しいことは知らないようだけど研究会のメンバーからの又聞きで、
早瀬由美さんの習慣だとか癖だとかを話してくれたわ。でも、もう種も
尽きたようだけど」

「祐子、次の電話ではっきり断った方がいい。いつまでもはっきりさせ
ないのは祐子らしくないぞ。豪同さんにも失礼だろう」

「分かったわ。あなたの言う通りにするわ」

「ところで、降霊会の方にはコンタクトを取ってみた？」

「わたし一人じゃ怖いし、あなたが「気を付けろ」って言うから降霊会
は訪問しなかったけど、会の人から電話があったわ。以前電話を掛けて
きた人よ。一度会に参加してみないかって。わたしはやんわり断ったわ。
でも、メンバーを紹介したいって言うので「一寸だけなら」と思って出
掛けてみたの。昼間だった所為か想像していたほど陰湿な感じのする所
ではなかったわ。でも、物音一つしない無響室のような部屋だった。大
きさは20畳くらいかしら。わたしはメンバーが取り囲んでいる丸いテ
ーブルの周りの空いている椅子に座るように言われたの。メンバーは7
人で、意外にも一人を除いて皆若い人ばかりだった。その中の50歳前
後の女性が会のリーダーのようだったわ。女性は3人居たわ、そうリー
ダー以外にね。わたしに電話を掛けて来た人はリーダーの補佐をしてい
る人で、35歳くらいの細身で少し鋭い目をした人だったわ。わたしが

挨拶すると、一人一人自己紹介をしてくれたの。早瀬由美さんについて詳しい話をしてくれたわ。彼女、ここで集団瞑想や幽体離脱の演習をやっていたようなの。リーダーの方の言うには、早瀬由美さんが一番トランス状態に入り易かったって。早瀬由美さんは凄かったようで、身体から抜け出さずと遠くまで行って来ることができたって。日本国内ならどこでも、いいえ、一度などアメリカにも行って来たことがあるらしいのよ。リーダーがこれから幽体離脱の実演をするから、見学しているようにと言ったの。その人たちの中の一人が実演をしてくれるようだったわ。部屋の隅に病院用のベッドが置いてあって、彼女はその上に横になったの。誰も合図をした訳ではなかったけど、その女性の身体がベッドに吸い付いたようになったわ。そうね、まるで死んでしまったようになったの。誰も一言も話さなかった。彼女以外の人はリーダーもみんな瞑目していたわ。わたしはどうなるものかと思ってじっと見守っていたの。そのままの状態です15分ほどじっとしていたの。誰も動かなかったわ。その内リーダーが目を開けて「戻りましょう」と言ったの。そしたらみんな瞑目を解いたわ。そしてベッドの上に横になっていた女性も目を開けたの。わたしはベッドの上の女性だけが幽体離脱したのだと思っていたら、全員がしていたようなの。ベッドに寝ころんだ女性は、あの体勢じゃないと幽体離脱できないとのことだったわ。みんな外の状態を話し合って確認していた。それから、リーダーがわたしの方を見て言ったの「今、全員幽体離脱をしたのよ。初めわたしたちは天井の上にいる、自分たちのこと、そう、あなたのこととも上から見つめていたの。それから少し外に出て、周りの景色を見て来たわ。駅からここに来る途中に公園があったでしょう。今あそこの公園で幼稚園の子供達が遊んでいるわ。パンダのアプリケの附いたピンク色の上着を着た保育士さんが付き添っているわ。まだ暫く居るようだったから帰りに確認してご覧なさい。ところで、あなたもこの会にお入りになるのかしら？あなたからは金色のオーラが出ているのよ。珍しいわ」って言ったの。でも、幽体離脱をするととても疲れるようなの。しかも、その間にあまり大きな音を立てると、身体に戻れなくなったり生命に危険が及ぶこともあるようなの。

わたしも音を立てないように注意されたわ。わたしはお礼を言って「入会するかどうか、少し検討させてください」と言って失礼したの。帰りにさっき言われた公園の近くを通ると、リーダーが言った通りピンク色の上着を着た保育士さんが引率した幼稚園児の一団が居たわ。幽体離脱って本当にあるんだって分かったわ」